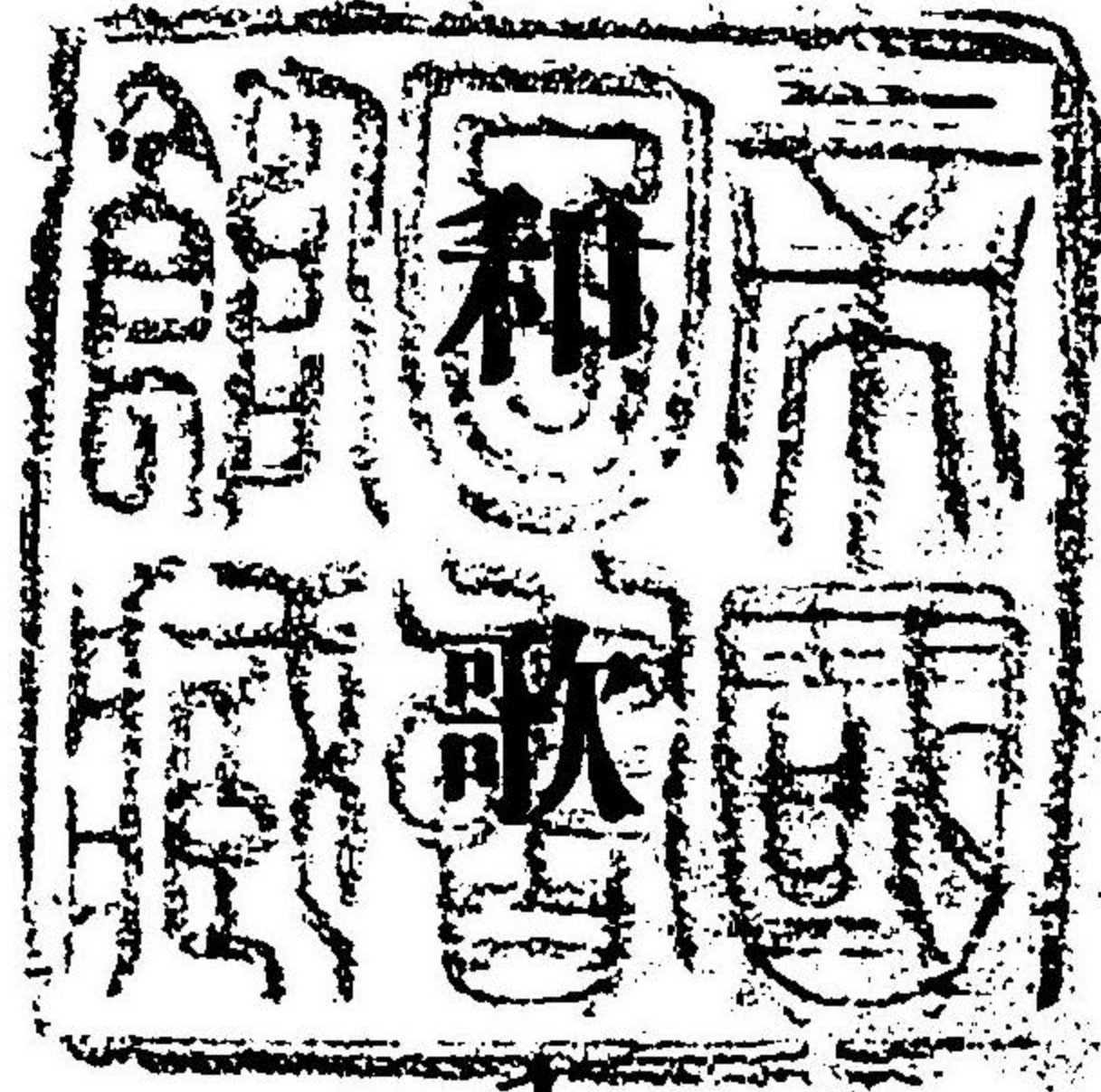




特22
118



人
門

金子薰園著



緒言三章

一、本書は、始めて和歌の門に入らむとする、うら若き人々の爲めに、一日の案内者たらむ事を期せる者。かるが故に、叙述つとめて、簡易平明を以てせり。予は明春、更に『草堂歌話』を出して、本書を讀了せし人々に、尙一、歩進めたる説話を續けむと欲す。

一、本書は、昨年九月より今年十二月に至る雑誌『成功之少年』に連載せる予が口述の稿を輯めて、訂正を加へ、且、増補したる者に係る。此零碎の小冊、未だ、意を悉さざる處多かれど、人若し是に憑つて、其門戸をだに窺ふ事を得ば、予が微志は達

和歌入門

金子薫園述

(一)

詠歌法とか作歌法徑とか、或は又詠歌自在とか作歌の楽とか云ふ類の歌書が始めて和歌を學ぶ人々の、必ず携ふべき参考書の様に標榜して公刊せられたのは、また十年と経過せぬ新しい過去であります。それでこれらの書物は、果して當時及び其以後の初學者を指導するに其道を得たものでしたらうか。否々此等の書物の示す名目は如何にも結構でありま

せられたるべき也。

一、本書は、故落合直文先生の遺訓に負ふ所、尠からず。稿成つて、謹みて、在天の御靈に謝しまつる。

明治三十九年十二月

東京湯島草堂にて

著者識

せられたるべき也。

一、本書は、故落合直文先生の遺訓に負ふ所、尠からず。稿成つて、謹みて、在天の御靈に謝しまつる。

東京湯島草堂にて

著者 識

明治三十九年十二月

和歌入門

金子薫園述

(一)

詠歌法とか作歌捷徑とか、或は又詠歌自在とか作歌の彙とか云ふ類の歌書が、始めて和歌を學ぶ人々の、必ず携ふべき参考書の様に標榜して、公刊せられたのは、まだ十年と経過せぬ新しい過去であります。それでこれらの書物は、果して當時及び其以後の初學者を指導するに其道を得たものでしたらうか。否々、此等の書物の示す名目は如何にも結構でありま

すが、其内容は何うかと言ひますと、要するに古歌を排列して、其古歌に類はれたる類語を併記したものに過ぎません。此様な古人の御取次は、舊く種々の書物が出版せられて在つて、最早今人の指を染むべき餘地を認めないのであります。

此外に、先年、西洋の詩學を基礎にした様な書物が、矢張詠歌法と云ふ名の下に出た事がありました。併し個様な種類の書は、直接入門者の爲めに、讀んで甚だ迂遠です、非實用的です。

初學者の入門の書は、先づ此の如きものとし、ますれば、初めて和歌に携はる人々が、師友と仰ぐべき参考書の無いのを嘆ずるのも無理はありません。殊に近時新しい歌を研究しようとする人々には、頼つて以て指導を受くべき書物が絶無と

言つても可い位です。

自分のこゝに講述しようとするのは、敢て作法を説くのではありません。自分のこれ迄經驗し來つた實歴談を御話して、新しい歌の少研究者の参考に供しようと思ふのです。斯る片々たる者も、まだ手を著けた人が無い様です。

順序正しく理論めいた堅苦しい事を述べるのは避けて、成るべく實用を主として、極めて分り易く、而して卑近な事から段々に御話して行かうと思ひます。

歌は難かしいものでせうか、易しい者でせうか。上手になるまで進むには、一朝にして至るものではありませんが、門に入るのは少しも困難の事はないのです。小倉百人一首の歌

は、津々浦々まで傳唱せられて、誰しも歌と云ふ者は此様なものであると云ふ事を、幼時から頭腦に浸み込まされてありますから、稍長じて卅一字を并べる位は、別段師に就く迄もなく、花が咲いて美しくいと思へば、それを美しくいと歌ひ得るのです。見たまゝ感じたまゝを、あからさまに三十一字に並べる事は、歌でも作つて見ようと云ふ人には、別に研究を要しないで出来る様に神は美しい御恵を、わが大和民族に賜はり來つたのです。

自分の亡くなられた母は、國文もよく作り、和歌も自在に詠まれましたが、自分に添乳そちしながら寝かしつけらるゝ宵々、守唄の様に百人一首の歌をすせられたのでした。夫が自然耳

に慣れて、七八歳の折、二十七字並べた歌を作つて、母に笑はれましたが、母はわが頭を撫で、此兒或は歌を詠める様になるかも知れぬと言はれた一言が、小供心に、何んだか染みんと嬉しく覺えました。母は自分の十三歳の時に亡くなられましたが、自分が今歌人として世に立つて、何うやら歌の詠み得らるゝやうになつたのを、苔の下から覽られて、微笑せらるゝでせうか。何うでせうか。

自分が初めて故落合直文先生に見參して、歌の御話を伺つたのは、自分の十七歳の秋でした。其折、先生は、

わけ行けば奥より奥に奥ありて奥こそわかね敷島の道と云ふ御歌を特に自分の爲めに作つて、御示しになりました。

歌の野の道は分けるに容易ではあるが、其奥を極めんとするには、忍耐と勤勉とで撓まずに進まねばならぬ、努力せよと云ふ意味深長の御歌です。

此教訓は單に歌のみでなく、總てに推し廣むることが出来ます。わが親愛なる少年諸君は、短歌を研究せらるゝに方つて、先づ此御歌を再誦三讀して、靜思せられたい。

(二)

自分の舊作に、

あけがたのそゞろありきに鶯の初音きゝたり藪陰の道と云ふ歌があります。歌の意味は平明で誰にも解釋せられ

ませう。これは東京の近郊の景色で、春寒きあけ方を、些かの修飾もせず、其儘歌つたものです。其儘歌つて飾りツけない裡に、多少の趣が認めらるゝとすれば、それは自然をありの儘に詐らずに寫した故せでせう。初學門に入るの \vee は何どうか、此入り易い叙景の門から進んで欲ほしいのであります。

所で、只自然を有の儘に寫せよと言つても、決して何でも彼かでも目に觸るゝ一切のものを、歌に入れよと言ふのではありません。汚ない溝などにけ子こ子の遊びでるのを見て、それを直ぐに歌にせよと言ふのではありません。某歌人は、裏の長屋に首溢りありと云ふ歌を公にして、世の嗤笑を招いた事がありました。これは極端なる例で、御話にはなりません、穿き

違へると、往々、こんな滑稽を演ずるものですから、断つて置きます。

前の鶯の歌を夕ぐれの景色と假定して、初句の「あけがたの」を、夕ぐれの」と置き更へたらば、何うでせう。明け方であればこそ「初音」が調和してよく耳にきこえ、あたりの景色が目には浮かんで来るのです。それなら、「初音」を「啼く音」としたらば、何うかと言ひますのに、無味乾燥の者となつて、明け方の景色に依つて起つた美しい感想は、滅茶滅茶になりますでせう。これらの道理は、よく飲込んで頂きたい。

(三)

前回に、初學者が先づ踏み入るべき徑路は、見たまゝの景色を、飾らずに寫すようにと云ふ事を御話して、自分の舊作であつた鶯の歌を擧げて、説明しました。見たまゝと言つても、自分に何の感じを興へない物でも何でも捉へて來て歌へとは申しませんでした。

そこで迷ひますのは、何う云ふのが歌に入るべき物で、又何う云ふのが歌に入るべからざる物であるかと云ふ疑問が起つてまゐります。之は先づ必ず起るべき疑問であります。

併し、前回に一寸申して置きました通り、ほつた子子などが汚ない小溝に遊いで居るのや、横町の白犬が隣家の黒犬に噛まれて自分の庭に追はれて來たのや、ともだち友達と喧嘩して帽の田の中に

抛^なうられたのや斯^かんな事柄は只今流行の「へなぶり」とか云ふ狂歌躰の作にすら入れる事を拒むでせう。況んや趣味を重んずる歌に於いてをやです。

然らば何^どういふ事柄が歌に入れられるべき物であるかと言ふに、假に朝早く起きて庭に下^{くだ}りるとする。庭の秋草には既に露が置き渡されて、涼しい微^{さか}風に、一様に花が揺^ゆれて露がこぼれる。隣り合つてゐる萩と桔梗とが、風が吹く毎に相寄つて、優^{やさ}しい奇麗な話をしてゐる様に見える。何だか宜い氣持になつて、歌でも作つて見ようとする。

それで、斯^かう綴つて見たとする。

そよ風に露がこぼれて涼しさうに萩と桔梗が話しあつ

てる

これだけでは、内容は出来ましたが、外形が御話のやうで宜しくない。然らば何^どうして外形を整へませうか。

第二句の「露が」は俗語であります。「朝露ちりて」と二句を改めて、第三句の「涼しさうに」の「さうに」が、俗語で且つ一音を餘して居りますから、「涼しげに」と直す。それから、四句と五句が御話しのやうである。これは何^どう改めませうか。

萩と桔梗とが此歌の主眼でありますから、五句に据ゑ直して「萩桔梗かな」とする。斯^かうなると、もとの五句を四句に廻して話しあつてると云ふ俗語を何とか歌らしい詞に直さねばなりません。五句は斯^かう「萩桔梗かな」と据りましたが、四句に

困ります。左様、かたらふらしきとでもしませう。

これで、何うやら外形が整つて、歌らしくなつた様であります。左に排列して見ませう。

そよ風に朝露ちりて涼しげにかたらふらしき萩桔梗かな

初歩の間は、斯ういふ風な路を辿つて、進んで行かれない。なるべく眼前の近い景色を寫して、工ます飾らず、飽くまで眞率に自然に、研究の歩を進めて行かれます。

(四)

此目的で、初學者の参考に、『叙景詩』と云ふ名で、青年歌人の集

を編んで世に出したのは、五六年前でありました。此書の附録に自分の當時の作を添へたのでしたが、今其中から二三抄出して見ませう。

鳥のかげ窓にうつろふ小春日を木の實こぼるハ音静かなり

塔のさきのみ見えてあがりあふ青葉わか葉に五月雨のふる

枯蓮にうすれし夕日かげきえて水おとさむく鴨ふたつ飛ぶ

日あたりの縁にならべぬ鉢植のうるゑの紅葉をらぎくの花

何れも、實景實境をそのまま寫したもので、幼稚と云ふ誹を免れませんが、其代り厭味が無くて、讀んで或さつぱりした感じのよい景色を思ひ浮べる事が出来ませう。

「鳥のかげは、小春日の暖かい日の午後ひるごの景色であります。鳥影窓に映るといへば、單に長閑な春の日を思はしめますが、木の實こぼるゝと言つて、初めて、一首に小春の靜かな趣を傳ふるのであります。斯ういふ趣は諸君の容易に捉へ得る所で、むつかしくも何ともないのであります。併し、假に此歌の四句と五句とを、おち葉の音のさわがしきかな」と改めるとする。然して、斯う云ふ實景に接して、その儘を歌つたものとする。併しながら、落葉の騒がしさは、木枯のふきすさぶ、寒い日

を思はせて、小春の様な暖かい靜かな感じを與へません。上句の小鳥の影が窓に映ると云ふ如き、靜かな暖かな趣に對し、落葉の騒がしさを配するのは、木に竹を接ぐやうなもので、釣合が取れない。釣合と云ふ事は、何にでも必要ですが、折角面白い趣を捉へながら、よくこれで失敗するのですから、見易い事にも十分注意をて誤らぬやうにせたい。

前の「萩桔梗」の歌でも、萩と桔梗だから可いが、若し萩に秋海棠を配して、五句を「萩秋海棠」と改めたら、變なものになつてしまふ。調子の悪いのは第二として、感じが別々で、趣がはなれなくになります。萩と桔梗となら、いかにも相寄つて優しい情を語り、纏うてありませう。

むかしは題詠と云ふ事がありました、歌を詠むには必ず題に據つたものでした。今でも頭の古い歌から一步も出る事の出来ない人達の中には、まだ、此題詠と云ふ風習が行はれて居るのです。題に據つて詠むと云ふ事は、あながち悪いとばかり申すのではありませんが、題に制せられて、題の爲めに作ると云ふ傾向は、字句を細工して唯巧緻に走る事のみ長じてしまつて、大事な自然に遠ざかつて來るのです。例へば『月前情』と云ふ題が出たとする、月見ればち々にもものこそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねどなどいふ古歌を想ひ浮

べて、月に對する情は必ず悲しくなくてはならぬ、わが身一つと云ふ様な巧な句を案出せねばならぬ、と云ふ如く一にも古歌、二にも古歌と、自己の思想などは、一向御構ひなしで、古歌をもじくる事はかり考へて來たもので、生氣の無い事は夥しいものでした。月の題は種々雑多であります、其中から極端な者を擧げて見れば、翫月と云ふ中にも、終夜翫月、連夜翫月、嶺上翫月、人家翫月、翫明月、池上翫月、此様な風に、色々に分類されて居る。月を翫ぶのみならず、歌も翫んで、茶の湯や掃花と同じ性質のもの、様に道樂視するに至つては、御話にならないのです。此弊風の大部分は、確かに、題詠から來たもので、和歌が俳句の様にめざましい發達をしないで近代に至つたのも、

止むを得ない譯であります。

自分が前回に於いて諸君に寫生を御勧めして、觀たまふ感じたまふを飾らずにありの儘に歌はるゝ様にと申したのは、此題詠と云ふ惡手本に左右せられて、自然を忘れ來つた舊歌人の跡を踏まぬ、新しい歌の門に入る一歩であります。併し觀たまふ感じたまふと言つても、何ういふのが歌に入るべき物又歌に入るべからざる物であるかと云ふ區別に至つては美非美の分るゝ所で、一寸説明する事が出來ません。是に於いて、自分は前回で實例を擧げて、歌に入るゝべき景色、其景色を捉ふべき場合、及びそが修辭の用意にまで説き及ぼして置きましたから、諸君は抄くとも寫生の方法及び趣味に就いて

或何物かを會得せられた事と思ひます。

併し之は僅に一部分であつて、未だ或景色に對して、其歌材か否かを明かに識別する事が出來ないでせう。そこで、自分の亡くなられた恩師が、初學者に課せられた題目を左に列擧して歌に入るゝべき材料と場合とに就き、師がいかに入門者の爲めに懇情を注がれたかを偲ばうと思ひます。諸君は左の師が遺訓に依つて、自分の説明の足らざるを補ひ、十分反覆して、玩味せられた上、日課のやうに片端から作つて行つて御覽なさい。さうして其傍、生きた自然を寫して御覽なさい。決して得る所が抄くはありません。

- 鎧櫃に、輪飾かゝれり。
- 羽子板抱きて、少女ねぶれり。
- 車の上に、羽子飛ぶ。
- 芭蕉の霜よけを、とりさりぬ。
- 残れる雪に、雉子の足あとあり。
- 庭の芍薬、赤き芽をいだす。
- 春たちて、雪佛かたくづれせり。
- 雪きえて、山のすがた變れり。
- 舟の上にて、女、芹を洗ふ。
- 梅のうつぼに、雪まだ残れり。
- 俎まないたの上なる、齋なげな雪を帯ぶ。

- 焼跡の柳、片枝もえいでぬ。
- 岩のあとに、露の臺もゆ。
- 梅さける門を、月に叩くものあり。
- 梅の枝折りしに、をしき蕾こぼれぬ。
- 接つぎし桃、はじめて花さく。
- 春雨の霽るゝを待ちて、菊の根分せり。
- 土筆もちながら、小兒母の膝に眠れり。
- 麥畑に、古き瓦を拾ふ。
- わかれ路の柳、むすばれながら靡く。
- 菜の花の上に、同じ色の蝶とぶ。
- 野守の狭き庭より、雲雀たちあがれり。

- 摘菜のかへるさ、孝女の墓を訪ふ。
- 旅人、菅笠に歌かきををり。
- 赤き椿と白き椿と、庭に落ちたり。
- 鬼瓦に、燕とまれり。
- 瓢ひょうの塵をはらふ。
- おぼろ夜に、扇ひろひたり。
- 水車の上に、さくらちれり。
- 蟻、さくらの花をひきてゆく。
- 雨にちりたる花、蓑につきぬ。
- 落花、琴の上に飛ぶ。
- 若鮎、流にさからひて、水の上に飛ぶ。

- 梨の花をいけて、枕の草子を讀む。
- 蝶の羽風に、芥子の花ちりぬ。
- 娘失ひたる母、佛壇に雛を飾れり。
- 牡丹二ひら三片、かさなりてちりぬ。
- 丹躑躅にっしゆくのかけに、白き蛇ねぶれり。
- 手のとゞくべくもあらぬ崖に、藤さけり。

(六)

前回で入門者が必ず迷ふ可き歌材の範圍に就いて、先師の遺された歌題の内先づ春の部を列舉して是に據つて片端から日課の如く試作するようにと御勧めして置きました。が、こ

ここに先づ彼の題の内から、二三の作例を試みて参考に供しようと思ひます。五番目の題に「雉子の足あり」と云ふのがあります。「雉子のあとあり」とすれば、既に四、五句即ち下の句を成して居るのです。此景色は無論早春の山景の趣で、時は朝の程であると云ふ事も分るでせう。さう極まると容易に左の如き歌を得る事が出来ます。

朝行けば春の日めきし山かげの残れる雪に雉子のあとあり

併し第二句の「春の日めきし」が整ひません。一寸した言廻しのやうですが、これを「春日ほのめく」とすれば、景色が一層明瞭して来て、歌柄も上つて来るのです。修辭の上に何うか此呼

吸を味はつて貰ひたい。

それから漸次に見て行くと「土筆もちながら小兒母の膝に眠れり」と云ふ題があります。これは、先師の

つくづくし手に持ちながら眠る子の夢は春野になほ遊ぶらむ

此御歌が能く此題意を悉して居ります。此様な趣は誰も見る處で、而も歌に入れられたのは、先師を以て初めとするでせう。繪のやうな清い美しい、何だか恍惚と眠くなつて來さうな趣が籠つて居ます。

春の題も終りに近い處に「牡丹二片三片かさなりてちりぬ」と云ふのがあります。これは極めて華麗な景色で、晩春の

さびしい日影を配するよりも、暖かい雨夜などに、或富家の子の姉妹が、卓を並べて、一人は物語を読み、一人は手習などとして居るとする。燦たる燈影が二人を照して、傍なる瓶の牡丹がふと崩れ初めた。二人は、物語と手習の上に注いだ美しいまなざしを上げて凝視する。燈影が花の様なる二つの頬と豊麗なる牡丹とに榮える。此様な情景を寫したら、屹度面白からうと思ひます。併し、此複雑した趣を寫さんとするは初歩の諸君に取りて至難の業と考へます。かるが故に單に美人と春の燈影を配して、

美しき人のふみ讀む春の灯に牡丹くづれぬ二片三片など綴つて見ても可いでせう。併し、之は初期の間で「牡丹」と

云ふ字音に對して、初二の句「美しき人のふみ讀む」がタルんで緊まらぬと云ふ事に考へ及ぼす様になると、其人は第二期に入りかけて居るのです。

麗人の書よむ卓の灯の前に牡丹くづれぬ二片三片斯う改めると、調子が引きままつて、麗人や卓が牡丹に對して調和が好くなつて、唐美人の袅々たる姿が、眼に浮んで來るでせう。

春の部の作例は此位に止めて置いて、夏、秋、冬と順次に歌題を連載する事にしませう。諸君は、如上の作例に鑑みて、成るべく一題をも洩らさぬ様に試作して行かれないのです。

夏の部

- 古寺の縁のあたり羽蟻飛ぶ。
- 小兒明日咲くべき朝顔の花を數ふ。
- 卯の花、露の葉の上にこぼれたり。
- 畑のいちご、雨にぬれぬ。
- 合歡の朝風に蝶夢ながら飛ぶ。
- 眠らむとして合歡の葉うごく。
- 紅の花に白き蝶とまれり。
- 打水の雫飛びて、朝顔の蕾をぬらす。
- 若葉の奥に瀧の音す。
- 塔の尖、若葉の上に見えたり。

- 蝙蝠、古社のあたりを飛ぶ。
- 乳母の家を訪ひきて、時鳥をきく。
- 田植唄をきいて、手帳にゑるす。
- 野川に、賤の男馬を洗ふ。
- 隣寸あめりて火つかず。
- 橋落ちて、小僧かへらす。
- 五月雨に、壁の色紙半はがれたり。
- 蓮の葉がくれに澤潟さけり。
- 五月雨に、池の河骨見えすなりぬ。
- 辻堂のめぐりに楠の花みだれたり。
- 壁にたてたる琴の緒自ら絶えたり。

- 手洗鉢の柄杓の上に蝸牛道ふ
- 鯉躍りて蓮の浮葉うごく
- 禿欄干によりて眠れり。
- 花菖蒲をもちて渡舟に乗れり。
- 螢かきたる扇をもらふ。
- 子の忌日に螢を放つ。
- 奉納の手拭、すゞしき風に動く。
- 風に吹かれて、縁の手燭影定まらず。
- 燈籠に灯をともす。
- 翁、陣羽織を曝らす。
- 薬玉の紐に小猫戯れをり。

- 鯉躍りて、萍四方にわかれたり。
- 清水のもとに、山伏笈をおろす。
- 瀧のえぶきに、百合の花うごく。
- 床の間の石菖、なほ夜露を帯ぶ。
- 水一すぢ、月に水鶏なく。
- 宵の釣瓶の、雫も落ちあへぬに、夜は明けぬ。
- 蚊遣火に、古き筆を焚く。

(八)

時雨か落葉か、書窓を叩く音ひまなき冬の夜は、深々と更けて、火鉢の火の灰がちになつた頃、浸み透る寒さを、前回の課題

夏の部に考へ及ぼして、炎暑の節を想ひ浮べたならば、酷熱な
 状景が目の前に現はれて、扇でも手にしたくなつて來ますで
 せう。

例に依つて、彼の課題の中から、二三作例を示さうと思ひま
 す。そこで、

九番目に、若葉の奥に瀧の音す。と云ふ題がありませう。之
 は山中の初夏の景色で、刻限は午下りと見る、日は未だ左程暑
 くもないが、峻しき山阪を上り下りして、軽い扮装の旅の衣も
 大分汗ばんで來た、峠の茶屋までは少し間がある、何處か休み
 場處もがなと思つて、尙、登て行くと、近い若楓の林の奥に瀧の
 音が聞える、それが非常に清爽な感じがして、今迄の暑さも勞

れも忘れて、其瀧の音する方を見守つたと云ふ趣を寫して見
 ませう。

笠とりて汗ぬぐひ居る峠路や若葉の奥に瀧の音する
 たゞ之だけでは題に蛇足を添へたのみで、何の興味もありま
 せん。笠とりて汗拭ひ居るは平俗の趣で、若葉の奥に瀧の音す
 ると云ふやうな清い涼しい感じに伴ひません。三句の「峠路
 や」を初句に置き更へて、二三句を工夫して見ませう。

峠路や若葉楓のそよ風に小笠ふかせて瀧の音さく
 二三句を改めんとして、何時しか全體が變つて來ました。斯
 う改めて面白くなつたでせうか、否々、若葉楓のそよ風に小笠
 ふかせてなど奇麗な辭句ではありますが、瀧には調和しませ

ん。それに瀧の所在が分りません、若葉の奥と云ふ心持が出て居りません。つまり瀧がホンの附け加への物となつて、主眼點が逸せられた譯です。之では困ります。

斯うなると色々に迷つて、好い思案も出なくなつて來る。こゝで詩筆を棄てゝゑまへば、それ限りですが、更に／＼思を潜めて工夫せねば向上の路に進む事は出來ません。然らば、何う改めませうか。

峠路やふときこえ來し瀧の音に若葉楓の奥透かし見る
峠路やは依然初句に置き、二句の「若葉楓の」を四句に、五句の「瀧の音」を三句に置き更へ、二句と五句とを全く異つたものに改めて、右の如き一首を得たのであります。二句の「ふときこえ

來しにて、單調なる山阪を上り下りして、若葉を渡る清風の外に耳底爽涼たる瀧の音をさく快感を想はしめ、五句の「奥透かし見る」にて旅の興を想ひ浮べしむる事が出来るに近いかと思ひます。今一度推敲したならば、佳作たるを得るでせう。尙、作例一二を示す筈でしたが、餘り長くなりましたから、他は諸君の試作に任せて、「秋」の部の題を次に載せる事に致します。

(九)

秋の部

○蝸牛、桐の葉と共に落ちたり。

- 紫苑、たふれながら、花さく。
- 稻妻の光に、萩の露を見たり。
- 桔梗の花のひらく力に、露こぼれたり。
- 芒原に、鬮體あり。
- 追分の芒の中に、石ぶみたてり。
- 夜深くして、星ひとつ飛ぶ。
- 寺の湯殿に、こほろぎ啼く。
- 野川の岸に、蓼の花さけり。
- 川をへだて、砧の音す。
- 月あかき、夜、美人、縁によれり。
- 月あかき、夜、美人、縁によれり。
- 月あかき、夜、美人、縁によれり。
- 月あかき、夜、美人、縁によれり。

- この夕、亡友に似たる人に往きあひぬ。
- 亡き友の寫眞、や、うすくなりぬ。
- 山里の友、歌そへて、おめち、おくれり。
- 夢に、詩の神に逢ふ。
- いづこか、鼓うつ音す。
- 秋の夜、刀をうつ音す。
- 鳥居の前に、鹿二疋居り。
- 峰の鹿啼きやみて、月出でたり。
- 月のぼりて、砂の上に、二人の影うつりぬ。
- 風にふかれて、瘦馬さむげにたてり。
- 雁なく夕、夫の遺髪と、いさぬ。

- 母衣かけて、車中に雁の聲をきく。
- 地圖を手にして、雁をきく。
- 常夜燈、霧の中にきえ残れり。
- 闕伽棚に、紅葉折りちらしたり。
- 病める女、秋海棠を見てあり。
- 紅葉の葉に歌かきて、妹が門にすてゝきぬ。
- 鐘樓にのぼりて、くれゆく秋を惜む。
- 秋の夕日、さむげに烏瓜を照らす。

(十)

題を列ねて作例を試みましてから、既に春の部と夏の部と

を了りました。作例を示したのは、僅かに二三題づゝに過ぎ
ませんでした。之は浮華を避けて、専ら實用を主とした方法
でしたから諸君を裨益する所、尠くなかつたと思ひます。前
回の秋の部の題の中から、又例に依つて二三作例を示す事と
しませう。

そこで、諸君の中の甲君が、「鳥居の前に鹿二疋居り」と云ふ十
九番目の題に依つて、左の如く作つたとする。

十五夜の月のあかきに鳥居の前紅葉に鹿を見て通りけ
り

此作などは、確に題を活かしたもので、月夜の趣にした所など
観察の凡ならざるを見るのである。が、言廻しは整ひません。

どう整はぬでせうか。先づ初句と二句とが長過ぎる「月の夜や」と初句に約めてよろしい。それから三句の「鳥居の前」が「音を餘した故に重苦しい、之れを二句に廻して「鳥居の前に」とする。初句と二句とは出来ました、三句は何うしても鹿を置かねばなりません。四句と五句とは、原作のまゝでは、鹿が主だか、紅葉が主だか分明しません。無論鹿が主でなければなりません。三句を「臥す鹿の」とする、四句は紅葉を置くべき順序であります。紅葉は散つて鹿の背にかゝつて居つた方が面白いでせう、紅葉かづきてとする、紅葉を被いで、鹿の寝て居るなど、宛で繪のやうではありませんか。それが月夜ですから、一層美しい感に打たれませう。そこで、五句は無造作に「繪に

似たるかなと結びませう。

左に一首を書き直して見ます。

かな
月の夜や鳥居の前に臥す鹿の紅葉かづきて繪に似たる

諸君は、何うか原作と對照して、推敲すべき順序方法に就いて、御考へ下さる様に希望します。

次に乙君が三番目の題「稻妻の光に萩の露を見たり」に就いて、左の如き作を詠じたとする。

何げなく裏の小庭にたゞすみて萩の露見し稻妻の夜
よろしい。唯、上句が日中の景色の様であつて、五句に至つて

初めて「稻妻の夜」と置いたのは、景色が不明瞭です。それ以上句がタルんで、稻妻の如き瞬間的動作を現はすものに對して、悠長過ぎませう。

初句の「何げなくはよろしい。二句は「裏の小庭」よりも「草の扉」の方が「萩の露」に對して適應します。それから三句に是非時間を定めねばなりません。そこで「宵闇を」として、闇に稻妻の光を伏在して置く。四句は「萩の露見る」と現在に改めて、五句を「稻妻のして」と強く改めたい。草の扉に立つ足もとに稻妻光りて、其足もとの萩の露を見るなど、何と美しい寂しい景色ではありませんか。左に一首を書き直して見ます。

何げなく草の扉に立つ宵闇を萩の露見る稻妻のして

さて、これから冬の部の題に移ります。季既に寒に入つて、満目の光景、此等の題と適合して、諸君の吟思を惹くこと、更に一層と思ひます。

(十一)

冬の部

- 庭鳥、雛をいだきて、寒さをわぶ。
- 水涸れて、水車めぐらす。
- 霜の夜、車夫から車をひきゆく。
- 鷹に蹴られて、白鷺ひくく飛ぶ。
- 霞、猿曳の猿をおどろかす。

- 書の中より、紅葉の古葉あらはれぬ。
- 時雨ふりきて、柘をぬらしぬ。
- 枯あしの中に、捨小舟あり。鷺おりぬ。
- さむき朝、葱を洗ふ。
- すてたる草鞋に、霜おけり。
- 霞、棕櫚の葉をうつ。
- 鞍の上に、霜おきぬ。
- 木の葉のつもれる垣根に、寒菊さけり。
- 草枯れて、野をゆく狐、かげあらはなり。
- 風に動く落葉の中に、みそさゝい、まじれり。
- 濱千鳥、波の泡をふむ。

- 吹雪の夜、薬とりに行く子あり。
- 櫓のあとをたどりて、雪の夜路を行く。
- 山家に、みめよき女、楮火たきてあり。
- ふゞく夜、手負の猪に遇ふ。
- 水仙の鉢に、雪すこしふりかゝれり。
- ひよ鳥来て、庭の雪に南天の實をこぼす。
- 雀飛びて、小笹の雪をちらす。
- 雪の夕、峰の庵を訪ふ。
- 巡查、迷子をつれてゆく。
- 床なる冬牡丹、花ひらかむとして、ひらかず。
- 鼠、枕頭の薬瓶をたふす。

- 寒き夜に、佛をきざむものあり。
- 煤掃の日、なき娘の難いできぬ。
- くらき燈の下に、女衣を縫ふ。
- 夜店にて、一ふりの古刀を買ふ。

(十二)

前回の冬の部の課題に就いて、讀者諸君の中の丙君が、七番目の課題時雨ふりきて、柩をぬらしぬを試作して、

夕時雨森かげすぐる白張の提灯ぬらし柩ぬらしぬ
と詠じたとする。之などは見たまゝを直寫して、少しも無理な處なく、落葉さびしき森に、白張の提灯を配したる手際は、觀

察の凡ならざるを認めます。而して提灯ぬらし次に柩ぬらしぬと置いた處など、かりそめならぬ用意を伺ふ事が出来ませう。

それから十三番目の「木の葉のつもれる垣根に寒菊さけり」を題にして、

霜ぐもり晴れたる冬の日影うけて寒菊さけり破れし垣根に

といかにも無造作にやつてのけたものとする。世を侘びた隠士などの住む小庵の様が、目に映じて、ごく淡い趣を覺えられます。初句の「霜ぐもり」は四句の「寒菊」を起し五句の「破れし垣根」を起すべき好い動機であるのです。たゞ、二句三句が餘

りありのまゝ過ぎて、あつ氣ない感じを起させます。初心の人としては、之で結構ですが、一步進んで来ると、何だか物足らぬ感じがして来ます。

何う修正したら可いかと言ふに、冬字が先づ餘計物である、全く晴れたるよりも、薄日うすびがぼうツと映さした方がよろしい。「くもりながらに薄日しぬ」と改めて、四句を寒菊さけると直したなら、原作の單純な景色が幾分か趣あるものとなつて、現はれませう。

左に書き直して見れば、

霜ぐもりくもりながらに薄日うすびしぬ寒菊さける破れし垣根に

自分は昨冬此歌と趣の似て居る作を得た事がありました。それは、

霜ぐもりみぞる、垣の殘菊に晝餌ひるま乞ふとて小鹿こじかよ啼くか

と云ふのです。一寸趣は似て居ますが、含まれたる事柄は複雑して居ます。詞意平明で、解釋しなくても、分明の事と思ひます。之は單に趣が似て居ますから、引照したのみで、初心の人に直に之に倣へと言ふのではありません。短歌は詩形が小さいのですから、餘り複雑した思想を盛らうとしますと、都合點の何だか解らないものを得がちなのです。それも老練の人なら、巧くこなして行きますから、差支もありませんが、さ

もなくしては、詞を整へるに、容易でありませぬから、勢ひ變手古な物になつて、邪路に迷ふ事になるのです。前記丙君の作の如きは、分に應じた佳い出来であつて、初心の人は、皆斯ういふ傾向に趨いて欲しいと思ひます。進歩には總て階段が在つて、一足飛びを許しませんから、易きに就いて、徐ろに進んで行かれるやうにせられたい。

それから、諸君の中の丁嬢が、二十六番目の課題、床なる冬牡丹、花開かむとして開かず、に依つて、

姉君は病みておはせり冬牡丹今日は花咲け君待ちまさむ

と題意を推し擴めて、詠じたとする。寫生外に亘つて、後章に

説くべき情味を加へたる歌の範圍に入つて居ますが、序ですから、此歌に就いての批難を言ひませうならば、先づ上の句が俳句めいて、下の句はほんの附け加への様な態すがたです。同じ附け加へでも、上の句が下の句の説明となつて居る場合は、左程變でもありませんが、下の句が上の句の説明となつては、ツマリ俳句の説明となつて來ます。之はひとり此作者にのみ言ふのではありません。一時、俳趣味を歌に入れる事が流行でして、十七字で言ひ了せる事を、わざ／＼三十一字に延した、餞細工や、延びた蕎麥の様なのが續出して、俳趣を加味せんとした好傾向を誤認した人が尠くなかつたのです。之は尤も注意すべき事で、歌の存在を明かにせねばなりません。

然らば、冬牡丹の作は、いかにせば、歌の存在を明かにする事を得るか、と云ふ事になつて來ます。先づ「冬牡丹」を初句に置き、二三句を「病みます姉の枕邊に」と改め、四句の「今日」を今朝に改めて、左に書き直して見ます。

冬牡丹病みます姉のまくらべに今朝は花さけ君待ちま
さむ

原作には「枕邊」と云ふ、場處を指定した詞が缺けて居ます。場處が分明しませんと、散漫に流れます。

(十三)

前章で日課の歌題の講述を了へましたから、之より、一步進

んで、實地の景物に就いて、材料を捉ふる順序方法を、御話しよ
うと思ふ。之までは御草紙へ習字するに、手を取つて貰つた
ものが、急に師匠の手を離れて、諸君各自に、草紙へ向つて、曲り
なりにも、やつてのけんとする意氣で、自分の課する題に對し、
よくよく心を留めて、取材し、試作して貰ひたいのです。

先づ「梅」と云ふ題が出たものとする。諸君は先づ梅を中心
にして、色々な趣を考へて見る。自分は今まで何ういふ場處
で、何う云ふ風に梅の花を観たであらうか、何ういふ場處で見
たのが、一番おもしろかつたであらうか、と云ふ事に考へ及ぼ
す。で、次の様な事を考へたとする。

朝早く學校へ行く途中、小家つゞきの垣根道で、一番古びて

小さな柴の戸に一本咲いて居る梅が、一朝ごとに蕾を破つて、ちらほら咲いて居つた花の梢は、五日目七日目の朝となると、満枝花ならぬはなしといふ様で、清香を送る事が夥多しい。それが二日三日と過ぎると、はや盛りが過ぎて、午後学校の歸途、帽に肩に、手にせる書包みに、二片三片散りかゝるのである。今小鳥の啼きごゑがしたが、あの小鳥が花を散したのであらう。あの小鳥は鶯ではなかつたやうである。鶯は朝のうち枝に来て、心ゆくかざり歌つたであらう。などゝ想像して歸宅する。歸宅して、縁側づたひに、自分の小さい書齋へ行く時、ふと庭の面を見ると、庭の梅は、遅れ咲きで二花三花、蕾を破つたのみで、他はふくらみかけた蕾と、かたい蕾とが、魁した花と

同じやうに、夕暮近い春の薄日を浴びてゐる。そよとの風も吹かないで、極めてのどかな日である。縁の柱に背を寄せて書包みを携へたまゝ佇立んで居る。俄に、うすら寒い風が吹いてきて、もろくも早咲の花が一片散つた。最前の落花はと心づいて書包みの上を見ると、結び目の下になつて、二片残つて居るのである。

其夜、雨が降り出して、風さへ吹き添はつたが、翌朝はうららかな日和で、頻に鶯のこゑがする。梅に来て啼くのであらうと、そうツと窓をあけたのであつたが、小さな鶯は飛び立つて隣の庭へ逸れた。そして、頻に朗かな聲で歌つてゐる。菽鶯の片なりな聲ではない。例の小さい古びた柴の戸の軒に、鳥

籠を吊してあつたのを見たが、あれは鶯で、昨夜の雨風に、胸つぶれて、籠を飛び出して、例の梅に宿つて居つたが、落花し盡した寂しさに、夜のしらしらあけを待つて、自分の庭の花の香を慕つて来たのではあるまいかと想像する。さて登校の途、例の柴の戸へ来ると、梅花は散りはて、いつも見る鳥籠が軒に見えない。して見ると、今朝の鶯は自分の想像した通りでは無かつたらうかと考へる。併しあの鳥籠の中の小鳥は果して鶯であつたらうか、若し鶯であつたとすれば、一朝位は啼きさうなものであつた。杯と考へつゝ来ると、いつか校門に著いた。始業の鐘が高う響いて、梅、柴の戸、鳥籠、鶯などの考は、一時に消え去つた。

斯く梅の追懐は、それよりそれと移つて、止まる處を知らない。そこで、今考へ續けた徑路に就いて、何ういふ處が歌になるかと考へて見る。小家つゞきの垣根道の一番古びて小さな柴の戸にさし出でた一本の梅は、最初の詩題である。

垣根みち小さうふりたる柴の戸のあけがた寒し白梅の花

一もとの梅まだ咲かぬ柴の戸をはた／＼打つか春寒き風

梅が香にふと見いでたる柴の門同じ門なる垣根路にして

など、一つの題で、多少趣を異にせる三様の作を得たとする。

此中で何れが題意を活かしたかといふに、終りの「梅が香に」が勝れて居る。最初の「垣根みちは餘りに題意に拘泥して、説明に過ぎて居る。柴の戸のの戸に掛けて、あけ方と置いた處など、古歌の慣用手段で、文字を弄するの弊がある。此掛詞の事に就いては、追うて後章、古歌の研究中で、悉しく御話しようと思ふ。それから、あけがた寒しも景色が大き過ぎる。野の丘などの老梅の林に、月ありあけた感じがする。次の「一もとの」は題意と少し離れた趣が見える。四句の「はた〜」打つかなど、春寒と云ふ感じをきかせて、悪くはないが、題意を逸して居る。終りの「梅が香に」が矢張一番佳い。併し、三句の「柴の門」は少し重すぎる。「柴の戸や」と改めて、四句の「同じ門なるを」を「小家つ

づきの」と直したい。

「垣根みちは説明に過ぎてゐるが、最初に得べき作として、此歌を得るのは當然である。之では物足らぬと考へ直して、梅が香に」を得べき順序であつて、「一もとの」は、それより後、餘力で作る徑路となつて居る。

第一の詩題に就いて、斯く三様の作を得た例に倣つて、第二以下の詩題は諸君の探るに任せる。落花、小鳥、鶯、庭、縁の柱、夕風、夜雨、朝日和の何れにか諸君の最も美しい詩思は注がれるであらうか。

机の上に花瓶が載せてある。花瓶に紅躑躅が挿してある。紅躑躅に窓外の薄日が、ゆく春のさびしさを傳へてゐる。

此静閑な趣は、いかにして顯し得べきかと云ふ事を考へられよ。

此趣は繪畫でも顯し得るが、繪にしては、餘りさびし過ぎる。ごく小品では、逆も此風致を顯し難い。歌で顯すのが適切である。

假に此状景に人物を添へて見たら、何うであらう。机に凭つて思に堪へぬ人を點じたらば、何うであらう。其人は男であらうか、女であらうか。男にしても女にしても、厭味は免れない、男としたら、一層厭味である。人物を添へては、折角の淡

い閑かな趣がつまらぬ物になつて了ふのである。

此状景の中心點は、何であらうか。無論紅躑躅である。此紅躑躅と窓外の薄日を配して、歌は成るのである。

歌を作る場合に、此中心點を定むる事は、極めて必須の條件である。何を主として歌ふのだから、さつぱり分らないで、言葉を彼方此方から借りて来て、一首をつなぎ合す事は、ごく初學の間なら兎も角、さういふ習慣が嵩じては、模倣剽竊といふ悪癖が拭ふ事が出来なくなつて來るのである。畢竟何を歌ふと云ふ目的を定めずに、漫然筆を執るから起る事で、自己といふ事を忘れるのも、之に因るのである。

世上萬般の事、自分といふ事を滅する位、不愉快な事はある

まい。目的を定めないので、所謂行き當りばつたり主義で進む位、興味の無い事はあるまい。況んや、自己に慰藉を與へ、自己を發揮する目的である歌に於いてをやである。

さて紅躑躅が中心である以上は、此花の趣を明かに發揮せねばならぬ。藤でも山吹でも牡丹でも、晩春の花卉の何れにも適用が出来るやうでは、特に此花の存在を認めえぬ譯になつて来る。紅躑躅の特殊の風致を發揮して、其花が眼前に髣髴する様でなくては何にもならぬ。

紅躑躅を白躑躅として、何の位の差違があるかと云ふ事を考へて、人に問はるゝまでもなく、自ら問うて、自ら答へ得るだけの用意が無ければならぬ。

紅でなくては、薄日と云ふさびしみを受け得られぬ。白では、さびし過ぎて、色彩の配合から見ても、調和しない。それから、紅であればこそ、春の名残と云ふさびしさも、よく利いて、薄日が活きて来る。牡丹のやうな豊麗な花では、うらゝかな日でなければ、調和せぬ。面瘠せの、瀟洒たる躑躅は、よく行く春の趣を顯してゐる。

躑躅の色の紅いのも、此花と薄日との關係も、ほゞ會得せられた事と思ふ。

これから、一首を整へる方法に就いて、御話しよう。

文机の小瓶にさしゝ紅つゝじゆく春の日はさびしうさしぬ

これは見たまゝを飾りなく顯したもので、初歩の人の作としては、好い傾向であらう。併し、これでは、餘りに無雑作で、御話のやうである。唯、人をして「ハ、ア、左様ですか」と肯かしむるので、甚だアツケない感想を與へるに過ぎぬ。

ゆく春の薄日うけたる文机の小瓶にさびし紅つゝじ花前の作にくらべると、句の排列が多少整つて来た位で、説明的なのは變りもない。四句「さびし」とことわつては、さびしみを強ふる譯で、言外の餘情は汲むによしなくなつて来る。

ゆく春の薄日うけたる花瓶に紅き躑躅のうなだれてけり

「文机」を省いて「花瓶」にだけで、其場處を聯想さするやうにした

のは、道具立の多きに過ぎたのが省かれて、よろしい。道具立の多いのは、初歩の人の必ず取る手段で、煩雜を來すのが例である。すつきりとした感じの美しい歌を作らうと思へば、なるべく道具立を省略して、聯想に任せる様になければならぬ。前の作に比すると、すつきりとはして来たが、五句の「うなだれてけり」は、わざとらしく、且つ躑躅の如き小輪の花には適しない。併し三首の中では、此歌比較的整つてゐる。多少の缺點は、わざと修正をせずに、諸君の研究の餘地を残し置く事とする。

本章に於いて、諸君に御話した要件を概括すると、中心點を定むる事一、中心とせる物は他と更ふべからざる事二、道具

立の多きを省略する事三、此三要件に歸著するのである。

(十五)

今回は寫生に就いて、尙、繪畫と比較して、御話しようと思ふ。寫生は洋畫研究の初期に必ず踏まねばならぬ徑路のやうに、矢張、此新派和歌研究も、先づ寫生より入つて、十分之を習練して、成るべく自然の風景に接近し、自在に其眞を傳へ得るやうに進まねばなりません。

繪を描くのも、歌を作るのも同じ、事で、繪に描いて面白い景色は、矢張歌に作つても面白いのであります。

近頃水彩畫が盛に行はれて、學生間の愛好の度は非常なも

ので、休日などは水繪の具を手にして郊外へ寫生に出掛ける人が益々多くなつて行くやうです。水彩畫と和歌とは、極めて類似したもので、どちらも寫生より入つて、小景より筆を染め、其淡雅なる趣は、二者選ぶ所がないのです。

水彩畫の流行につれ、繪端書も版畫の需要が減じて各自曲りなりにも自筆で花瓶の花を寫し、或は窓外の小景を描いて、交友間に取りやりをする様になつて來ました。

郊外の草生に臥して、一人が繪を描けば一人が歌を書いて、其日の紀念に、其繪と歌との端書を、其場處から、友人の許に贈ると云ふ様に、繪と歌とは密接して來て、其繪其歌が、何れも自然に親近して、寫生と云ふことが疎かにせられぬ様になつて

来たのは、甚だ慶すべき事でありませう。

歌人は坐がら名所を知ると、昔は高く澄まして、古人の作例を金科玉條と心得、甚しきは、間違を間違のままに詠み傳へて、毫も怪しまなかつたものです。過ぎ去つた昔は、萬事此調子で大様に經來つたのですが、輒近、科學の進歩につれて、そんな迂濶な不忠實な事では、進歩の大勢に蹴落されて、ミジメな最期を遂げねはならぬのです。

寫生は前回御話した様に、先づ手近い机上の花瓶の花などから初めて、庭園に及ばし、それから漸次屋外の廣い所に及ばして行かれましたのです。

自分が先年選述した「叙景詩」一卷も此寫生の歌を輯めたも

ので和歌研究の初期の人の参考書として、彼の「水彩畫の榮」とか「水彩畫手引草」とか云ふ種類の書とは少し性質を異にした、作例を示して、直に其門に入らしめんとする目的であつたのです。此書は初版に止めて、版を重ねませんでしたから、今諸君の坐右に備へしむる事が出來ないのは、残念な次第です。就いては、此書中から、少しく作例を引いて、眞面目に寫生した跡を示さうと思ふ。

川下かはしにうかぶかもめも見えぬまでゆふべ一しきり花吹雪する

鈴菜すずなさく小島せじまを近みたまゝに蝶舞ひくなり舟のへさきに

弟の草紙干したる紅梅の花なき枝に四十雀啼く
 窓越しに見えし野でらの塔も霞にきえて春雨のふる
 下加茂のまつりひるより雨になりてぬるゝ冠の人美し
 き
 いたち出で、背戸に鷺鳥のなきさけぶ夏の眞晝を栗の
 花ちる
 あたゝかきあしたの空に雲いで、白木の宮居たち花の
 さく
 二つ三つ蜻蛉飛ぶなりともし火のともりともらぬ川づ
 らの里
 幣はたけを手に雁を見おくる人わかし加茂のやしろの秋の夕

ぐれ
 うちわたす堤十里の秋の水に流るゝ紅にや夕やけの雲
 松山の朝霧はれぬ日はさしぬ駒に鞭うつそのうしろ影
 枯あしに木がらしわたる月の夜を千鳥さくかな苦舟に
 して
 しぐるべく雲おもき夜の甲板かたはたに月なき茅渚かやの浦を見る
 かな
 挙げ来れば限りが無いから、之で一斑を諒解せられたい。此
 等の歌は、進歩した今から見ると、稚氣を脱しない所があるし、
 又趣味の單調と云ふ事も免れないが、何れも眞面目に寫生し
 たもので、初期の人々の参考に資すべきものであります。

是等の歌は、大概繪にする事が出来る。一誦すれば、眞に一幀の小品の繪が目前に顯はれ、延いては、自然の小景が展開せらるゝ思ひがしませう。

繪と歌とは、斯様に密接したもので、畢竟自然を寫すに繪の具に依ると、文字を借るとの差に過ぎません。歌と繪との初期の研究は、要するに此「寫生」といふ糸に連結されて居るのです。

(十六)

前回で『寫生』に就いて御話し、ました事は、和歌研究の初期に當つて、尤も必要な條件であります。想ふに、吾親愛なる少

年諸君は、自然の景物を些かの虚飾も交へずに寫して居らるゝ事でせう。初めには書齋の内の種々な事物を見ては詠む、それから庭園、次には近處の市中や田園の景色を、散歩がてらにでも見ては詠む、斯うして、見れば詠み、見れば詠みして居る間に、自由に出来るやうになつたらば、今度は旅行をするのが一番よろしいと思ふ。旅行は、一日のでも二日のでも、一ヶ月二ヶ月乃至一年二年のでもよろしい、又旅行先も、あながち名所舊蹟などを選んで行く必要はない、一本の杖、七寸の鞋、身を行雲流水の間に托して、行方定めぬ旅衣、氣の向いた處へ旅するのです、今迄は、書齋の中を見廻はすと、床上の花瓶、壁間の繪額、庭園の内を歩き廻ると、垣根の小草、築山の四阿ぐらゐ、乃至

近處の市中や、田園を散歩しても、多く馴れては居るし、狭くも
 あるので、その中から歌を得るのも、比較的困難でない、——無
 論佳作を得るのは却て困難であるが——處が旅行となると、
 自然種々な景色、種々な事物が、一時に目に見え、耳に觸れるの
 で、今迄よりも、その種々な中から中心點を捉へ、その中心とし
 た物は、他と更ふる事の出來ないやうにするのが、少しく困難
 になり、又道具立も多くなり勝ちになります。即ち、そこが練
 習を要するところ、はた旅行をした目的なのであります。困
 難に幾度も出逢つて、倦ます挽ます練習すれば、今迄の困難も
 左迄困難と感じなくなり、容易に中心點が捉へられるやうに
 もなり、道具立の省略といふ事も出來るやうになるのです。

丁度初めの内は、初めて高い山へ登つたやうなもので、幾千何
 幾萬何の脚下を俯して観ると、蜿蜒と無數の連山が走つて、自
 分の立つてゐる山の周圍に、無茶苦茶な塊をなしてゐる、それ
 を少しく馴れて、よく観定めると、この塊には歴然たる高低が
 ある——あれが何の山、これが何の谷、してみると、これが何の
 山、あれが何の谷、果ては、その山の上に湛へた湖も、その谷の間
 に流るゝ川も、一々名を擧げて指顧する事の出來るやうにな
 ると同様であります。さあさうなると、旅も今迄したのより
 面白く、歌も今迄得たのより佳いのが出來るやうになつて、旅
 行の興味は、作歌の興味に助けられて益々加はり、作歌の興味
 は、旅行の興味に助けられて、愈々増すものであります。

又旅行の餘徳には、寫生練習の以外に、精神の修養や、趣味の養成が出来る。この二者は又、短歌を作る上に、少からぬ影響を有して居るもので、精神が野卑だと、作る歌も自ら野卑になり、趣味が下劣だと、作る歌も従つて下劣になり易い。他の餘徳の一つは、今迄の庭園や田園と違つて、景色や事物が嶄新で奇抜で、平凡でないから、随つてそれらを詠み出でる短歌も、嶄新で奇抜で平凡でなくなり、佳作を得る事も先づ多いと言つて可いでせう。

以上、章を累ねて講述したのは、まづ寫生の練習、即ち短歌を作り初める時の、眼の著けどころの順序に就いて、あります。夫が、茲に一寸注意をしなくてはならない事があります。夫は

今迄述べて來た事は、たゞ所謂練習の順序であるといふ事です。歌の出來上つた上に於いては、決して、書齋を詠んだのが、庭園を詠んだのよりも劣つて居るといふのでもなく、又近處の市中や田園で得たのが旅行で得たのよりも詰らぬといふのでもない。要は無論、詠み得た歌の好い悪いにあるので、書齋を詠んだのに好いのもあらうし、旅行で得たのに、悪いのもあらう。書齋から旅行までの順序は、初學者の寫生の難易に過ぎないのであります。腐つた梨よりも、摘みたての苺の方が優れて居るやうなもので、旅行の歌は大きいからといつて、腐つた梨のやうに、まづくては閉口だし、書齋の歌は小さいからといつて、摘みたての苺のやうに、うまければ結構なのであ

ります。これは、解り切つた事のやうでありますが、誤解をしないやうにして貰いたい。

(十七)

先づ今迄述べて来た順序で、小さなところから大きなところ、狭いところから広いところと、詠み習ひ、作り習つた少年諸君は、もう何處へ行つて、どんな景色を見、どんな事物に觸れても、自由自在に、兎も角も三十一字の形式を備へた寫生的の短歌を得る事が出来るやうになつた譯であります。

一體、何事にも皆さうでありますがこの寫生の短歌を作る時にも亦必要なのは、忠實な精神で、精密な觀察をするといふ

事であります。即ち、春の草を観る時も、秋の木を観る時も、夏の水を観る時も、冬の山を観る時も、よくその春夏秋冬に應じて表はれる、山水草木の風趣を極めて、その自然の真相を出来るだけ十分に傳へるやうに、一句を苟もせず、一首を輕々しくせぬ心掛が大切であります。春の草の風趣は、秋の草の風趣と違ふ、夏の水の風趣は、冬の水の風趣と違ふ、その違つて居る風趣を、何うしたら十分に一首の上に言ひ表はす事が出来るだらうか、こゝが、即ち、忠實な精神と精密な觀察とを要するところ、寫生の短歌を作る面白味、讀む面白味も亦こゝにあるのです。觀察すれば觀察する程、微細の中に微細が見出され、壯大の上に壯大が見出される。たゞ粗笨な觀察や、不忠實な

精神で、自然に對すると、自然はどこを向いても同じ事、同じ物、同じ景色を示して居るに過ぎないやうな氣がするかも知れませんが、自然は決してそんなものではない。大に至つては大の大なる事驚くべく、小に至つては小の小なる事驚くべきものである。變化極まりなきものである。たゞ同じく土に生へて居るといふので、春の草も秋の草も同じやうに歌ひ、たゞ同じく川を流れて居るといふので、夏の水も冬の水も同じやうに詠んで、千變萬化、四季折々の趣致に、吾々を慰めて呉れる造化の恩寵に對しても、申し譯のない次第ではありませんか。自然の寫生の材料は決して盡きる期はありません。——精神を忠實にし觀察を精細にさへすれば。

それを、不忠實な精神で、不精密な觀察をすると、その寫生の短歌は、陳腐なものになつて了ふ。寫生の短歌の陳腐は、尤も忌むべく避くべきものであります。他人が或るところの寫生の短歌を詠んだらば自分はそのところを更に一層よく觀察して、更に一層清らかな作を得むとする心掛けが肝要であります。

大抵こんなだらう、まづこれ可いなど、自然の皮相をばかり詠んだり、歌つたりすると、陳腐になり、又淺薄にもなつて、寫生の短歌の生命を失ふばかりでなく、遂には寫生の歌が非寫生の歌になり、虚の歌——自然を偽つた歌になつてゑまつて、寫生の名義は何處へか消えて無くなつてしまふ。そ

して又この爲めに、思はぬ滑稽な失敗を招く事があります。

(十八)

寫生に關する種々の注意を守りながら、書齋から順々に初めて、旅行もした。忠實な精神で、精密な觀察もした。そして、兎も角も、三十一字の形式に纏つた。まづ、これで一首の短歌が出来たといふものであります。處で、茲にまた一つ、氣を著けなくてはならない事がある、それは材料と格調用語との調和といふ事でありませう。

一寸聞くと、何だか八ヶましい事のやうですが、さうでない。早い話が、例へば、人を叱ると假定して御覽なさい。人を叱る

といふ事は、兎も角も可憐な感じではない。眉を上げ、肩を怒らして、「コラ、貴様は何故こんなことをおたツと怒鳴る。この鋭い高い聲が、よく人を叱るといふ事に釣り合つてゐるのであります。又母に甘えると假定して御覽なさい。母に甘えるといふ事は、兎も角も壯大な感じではない。瞳を和げ顔を傾けて、母様遊びに行つてもいゝでせう？」と強請る。この優しい低い聲が、よく母に甘えるといふ事に釣り合つてゐるのではあります。これが若し反對に、優しい低い聲で人を叱つたり、鋭い高い聲で母に甘えたりしたら、甘える叱るといふ感じに不釣合になるのでせう。

引例は極めて卑近でありましたが、材料と用語との調和と

いふのも、即ち是なのです。叱るといふ材料には「コラ」といふ用語、甘えるいふ材料には「母様」といふ用語、これで調和が取れて居るのであります。

昔は何でも無闇に、漢音や吳音を歌に入れる事を避けて、念珠といふ音が鋭いといふので、思ひの玉などと、和げ、雲林院といふ音が鋭いといふので、雲のはやしの寺などと、和げて用ゐました。斯ういふ有様ですから、つひには、格調や用語の爲めに干渉されて、材料を取る範囲も、自然狭くされる傾向がありました。勿論、歌は歌ふ事も出来なくては困りますから、格調や用語を重んずるのは、當然であります。その爲めに、材料の制限をされるやうではいけない。材料に應じて、格調用語の

調和さへ出来てゐれば、佶屈贅牙に近いのも、あながち咎める事はないのであります。殊に今比較的短い詩形のうちに、比較的多くの意味を含めやうとする新しい歌には、そんな悠長な迂遠な飴細工をやつては居られません。漢音にまれ、吳音にまれ、乃至洋語でも俗語でも、そのまゝ、遠慮なく詠み入れて構まはないのであります。

併し、その詠み入れた漢音吳音、乃至洋語、俗語は、熟して居る詞、即ち生硬でない詞でなくては、歌の姿が低くなるといふ弊害があります。

熟して居る詞、熟して居ない詞、即ち生硬でない詞、生硬な詞といふのは何如なのか。これは一言では言ひにくい事であ

りますが、まづ舌に觸はるやうな詞、耳に聞きとり惜いやうな詞、意味は兎に角、耳に聞いて、何だか可笑しくなるやうな詞などは皆熟して居ない、生硬な詞の種類であります。

それから、今一つ注意をしなくてはならないのは、その遠慮なく詠み入れた漢音、吳音、洋語、俗語と、他の詞、即ち、以上の詞を一句に置いたならば、二句以下五句迄に用ゐる詞、又三句に据ゑたらば、一句二句及び下句に用ゐる詞との、一首の上の調和といふ事であります。水の中に油を落したやうに、水と油とが別々の有様では、歌は困ります。熟した、生硬でない詞そのものは、よし、浮いて居る油のやうに、きらくと光つて、美しいとしたところが、いくら合せても合せても、水に較べた他の詞

と、すつかり難らなくては、その油に較べた詞ばかり目に立つて、水でもなし、油でもなしのもの、即ち、一首として調和の出来てゐない歌になつて了ふのであります。

調和して居る、調和して居ない、といふ事は、生硬な詞、生硬でない詞の區別と同じやうに、矢張、一寸説明が出来にくい。一體この章の中の話は、多く讀んで、多く作つてゐる内に、各自自發的に領得するのであります。何れ、本書の末尾に「萩之家歌集」の解釋批評を試みる考でありますから、その時、實例に就いて御話する事にしませう。

斯くして、材料を得る方法と、その得た材料と、適當に言ひ表はす手段とに就いて、まづ一と通りの注意は知り得たのでありますから、この注意に従つて、諸君は、その出来た自作を十分に推敲せねばなりません。

推敲はどんなにしてするか。

先づ第一に、中心點が有るか無いか——それは有る。次にその中心は他と易ふる事が出来るか出来ないか——それは決して易へる事が出来ない。それでは、道具立は多過ぎはせぬか——それも適當に採り用ゐた。

これで内容には欠點のない事となる。

第二に、初句から結句まで、格調の釣合がよく取れて居るか。

舌に觸はるやうな用語は無いか、耳に聞き取り悪いやうな用語は無いか。意味は兎に角、耳に聞いて、何んだか可笑しくなる様な用語は無いか。是等の事を一々、よく自分で歌つては氣を著け、自分で聞いては氣を著けて、根氣よく直して行く。

——自分では、これで外形も完全のやうに思ふといふまでやる。

この推敲をして居る間は、實に他の知らない興味があるのであります。

何んでも、三十一字に纏め得たその時は、嬉しさが先に立つて、兎角自分には、欠點が見出されぬものであります。が、少し程経つてから、讀み返すと、自分ながら可らしい位な歌を得て、

喜んで居たといふやうな事もある。況んや、一日たち二日たちて後、読み返すに於いてをやであります。これは、出来たその時には、自分が作者の地位に在るので、多少自惚があり、得意であるから、欠點も見出し悪いが、程經ると、今度は批評家の地位に立つて、自作に對しても、比較的、冷靜な態度が取れるからであります。

推敲といふものは、仲々大切なものでありますが、注意をしないと、又飛んだ事になる時があります。それは、推敲し推敲し、居る間に、原の寫生した景色や事物と全く違つたものが出て来る事がある。そして、さもなく、自分が作り出したやうな景色や事物になつてしまつて、生氣いきほのない、死んだやうな自

然になつてしまふ。いくら推敲しても、何處までも、自然の寫生、自然の真相を傳へると、いふ事を忘れてはいけません。

で、これだけの注意をすれば、まづ作者自身としての義務はなし果てたわけであります。が、今度は是非、その得意の自作を、他人に見せて、その助言を乞ふやうにしなくてはいけない。

他人といふのは、歌の上の、自分の先輩か、若しくは、同じ趣味の同じ詩風の友人とか、兎も角も、遠慮なく腹藏なく言つて呉れるやうな人でないと、何にもなりません。これは至極結構です。どうも感服しました。など、言うて呉れるやうな人ばかりを探し出して、見せては喜んで居るやうだと、自分はそれでも満足だらうが、遂には、小成に安んじて、一向上達が出来ない。

古いやうだが、良薬は口に苦しです。

で、その遠慮なく腹藏なく言つて呉れる助言には、賛同すべきも、賛同しがたいものもありませう。が、よく心を静め、氣を和げて傾聴するといふと、岡目八目の譬喩たとへの通り、實際成る程と驚くやうな、自分には今迄少しも思ひも寄らなかつた欠點などが、多少とも發見されるものであります。

賛同すべき事を言つて呉れたらば、十分その助言に感謝し、早速その欠點を再考すべきであります。また、よし賛同しがたい助言でも、それを聞いて、忽ち、自作に難癖をつけるのと思ひ通り、腹を立てるやうな事があつてはいけない。折角十分の骨折をやつて、兎も角も完全だと思ひ込んだ自作に、こゝが

變ではありませんか、こゝは何とかありませんか、など、言はれると、一寸心持が良くないかも知れませんが、また、その人も言ひ出すからには、何となく、そのところが不完全なやうな氣がするのであるから、自分でも十分に省みて、更に一應、推敲すべきであります。

殊に寫生の短歌に助言を必要とする譯は、作者自身は、その對象たる景物を目睹し、それに接觸して居りますから、それを詠んで、全く詠み了せたと思ひ、また何遍讀み返しても、すぐその短歌からその景物を思ひ出して、はつきりと想像に描き浮べる事が出来たので、それも亦無理ならん譯であります。それを他人が見ると、追憶といふ事が作者よりも乏しいし、從

つて、想像の方も貪しいから、或は何と詠んだのか印象のはつきりとせぬのが、往々あるものであります。作者が讀者で、ひとりで作るひとりで読んで居て、それで短歌の能事が了つたものといふならば、兎も角も、苟くも、他人に美感を起させ、慰藉を與へるのが目的の一つであるからは、それではいけない。作者はひとりよがり、得意がつて居ても、而も、その寫生の短歌は、要するに無意味なものに過ぎないであらう。

ところが、助言をすれば、なにこれが餘情だ、餘韻嬌々たるどころだ、などといふ。併し、それは多く言ひ足らぬといふ弊に陥つてゐるので、同じやうでも餘情とは違ふ。

以上回をかさね、章を追うて説明し、注意した通りに練習す

れば、まづ、完全な、立派な寫生の短歌は、無數に無限に、出来るわけなのであります。そして又、これが、最も危険が少く、て、進歩が早いと思はるゝ、經驗上の、短歌入門の階梯であります。

(二十)

一體、今迄わが親愛なる少年諸君が、倦まず撓まず研究された寫生の短歌は、諸君がなつかしいと思つて見たり、うつくしいと思つて聞いたりした、景色や事物を、そのまゝ三十一字に言ひ表はし、讀者の想像に訴へて、その景物を思ひ浮ばせるのであります。こゝにまた、景物そのまゝを言ひ表はすうちに、それに對する自分の感情をも交せて、讀者の同感同情を得

るのがあります。

例へば、秋の月を見る。澄み渡つた夜空に青白い光、それをそのまゝ三十一字に言ひ表はせば、諸君の承知して居らるゝ寫生の歌であります。その澄み渡つた夜空に、青白い光を仰いで、あゝ、去年、磯に病んで、淋しく過した時にも、こんな夜があつた、と思ひ出すと、そこしもない風の音の中に、遠い海の波の聲がほのかに聞えるやうだ、などいふ、自分の感情を寄せて歌ひ出す。讀者もまた、作者の歌つた、その夜の景色を想像し、抱いたその夜の感情に同感して、作者と共に、遠い香かな心持になる。そこに美感があり、慰藉があるので、斯ういふやうなのは、概して、作つても讀んでも、何んだか一種、心の底に觸れるものがあるやうな氣がするのであります。

るものがあるやうな氣がするのであります。

これは、何に依つてゝあるかといふと、即ち、その情と、その景とが、よく一致し調和して居るからであります。作者が一の景物に對して起した感情は、或る程度まで、讀者も亦當然起し得べき感情でなくてはならない。なるほど、斯ういふ景物を見聞きしたら、斯ういふ感情をも抱くだらう、讀者たる自分も抱くに相違ないから、この作者も抱いたに相違ない、と同感同情するので、自分の思ふ事を述べて呉れたやうな心持がし、心の底に一種のなつかしみが起るのであります。

斯ういふと、調和した情景はいつも同一で、月を見れば斯う、花を見れば斯うと、帳面の讀み合せをして居るやうになつて

しまふだらう、陳腐な平凡なものになつてしまふだらうといふかも知れない。が、さういふ疑は、昔の歌に就いて多く起るので、昔の歌はひどく外形の拘束を受けたものでありますから、遂々自由自在に自分の感情を言ひ表はす事が出来ず、それにまた、以前も御話しえた通り、これには題詠の弊害も與つて力があつたのであります。ところが、今の新しい歌には、題詠といふ事を排斥するし、又、外形の束縛といふものが、まづ殆ど無い、三十一字の學式を守りさへすれば、用語も格調も、自由自在であります。で、複雑なこの日常に處して、起つて來る感情は、また自然複雑になつてまゐりましたから、一の景色、一の事物に對しても、人各清新な、そして複雑な思想を歌ひ出す事が

出來るのであります。

他人のまだ歌ひ出さなかつた感情を、深く深く自分の心の底に求めて、初めて清新な複雑な思想の歌が出來るのであります。さうかといつて、萬人のまだ氣の著かないやうなのをと強ひて作つて、無闇な突飛な感情を交へては、却つて、讀者の失笑を招くに了るのみで、同感同情などは更に起つて來ない事となる。一體、人の心は微妙な作用はたらきを持つて居て、瞬間に活動する、それをうまく捉へて歌ひ出せば、一首に生命を得るのであります。他人の歌ひ出さぬやうなといふのは、抱かないやうなといふ意味ではない、抱いても、まだそれを言ひ表はす事が出來ずに居るとか、又は氣が著かずに居るとか、いふ感情

の事なので、それを歌ひ出すのが獨創の短歌であります。併しながら、斯ういふ種類の短歌で、繊細に陥らず、粗笨に走らず、情景渾融の佳作を得るのは、寫生よりも一段手腕を要する事で、失敗すると、理窟になり厭味になりますから、初めの間は、まづ、避けて居る方がよろしい、寫生の短歌が上達すれば、いきほひ、この種類のを作るやうにもなるものであります。

(三十一)

前章には、感情と景物とが、一首のうちに入り交つて居る詩體に就いて御話しましたが、もう一つ、景物と交せず、純粹な感情ばかりを歌ひ出すのがあります。例へば、逢ひ見た時の

うれしさや、別れて來た時のかなしさなどを、丁度、寫生の歌で、その景色や事物を、そのまゝ描き出すと同様に、感情そのまゝを直接に寫し出すのであります。けれども、これは、作者の心の經驗の多い少い、または、その人格の高い低い、大いに關係を有して居て、大抵なのは、幼稚であつたり、淺薄であつたりし勝ちであります。そしてまた、理窟になり、厭味になる事が多いものでありますから、初學の人々は、先づ斯ういふものもある、といふだけに留めて置く方が、安全であらうと思ひます。

で、前章と本章とに説明した詩體の作例を、寫生の詩體の作例を擧げた例に倣つて、先年、自分の選抜して出版した『凌霄花』の中から、少し抜き出して置きませう。

草の香をかぎつゝたどる小羊の歩みおそきに鞭あげな
人

このねがひかなはゞ花よ紅うさげと土をさせたる秋草
の種

夕ぐれの雲にやらばやこの思ひかなる色に日は榮ゆら
むか

秋山にそゞろ影ひくゆふ雲のさまよふごときわが思か
な

あたゝかき涙もつ人母と呼びてすねても見たき秋の夕
ぐれ

わが歌と入江の秋のみをつくし潮にやせしといづれ寂

しき

夢おほき南歐の國のうた人にものおもはせて來しや夕

雲

落椿趁うて逢はむの宵なればこのせゝらぎよ月薄うさ

せ

大御心やすめまつらであなかしこ戦なかばに年あらた
まる

(二十二)

(問)新しい歌を作る上に、古歌の研究は、必要缺くべからざる
ものでせうか。

(答)左様、必要は必要ですが、ツマリ間接に必要なのです、即ち、古來の歌風の變遷を討ぬる點にあるので、古人は何ういふ歌の風で、何ういふ考を歌ひ來たつたであらうか、時代時代の特殊の思想聲調は、何ういふ風に推移し來つたであらうかを吟味して、明治時代の所謂新派和歌を突飛でなく著實に大成せしめん事を期する必要があるとあります。自分等の祖先が、何ういふ研究を爲し來つたか、一向無頓着に、たゞ前へ前へと進んで、古人の言ひふるした詞想を、さも自分の獨創の如く信じて、新しがる様では、甚だ見苦しい事で、片腹痛いのであります。

(問)古歌の變遷を知るに、何か簡便な書物が出版されて居ないでせうか。

(答)ありません。時代時代を代表するに足る歌人の作物を舉げて、註釋し批評したものが出て居りますと、甚だ便利ですが、未だ斯様の書は版になつて居りません。

(問)左様しますと、萬葉集から二十一代集と、片端から讀んで行かなければならないのですか、夫では餘り漠としてゐて、一寸手の著けやうが無いですか、何とか、今少し簡単な研究法は無いでせうか。

(答)御尤もです、萬葉集は和歌集の始めで、最初に研究すべき者であります、之が二十卷からありまして、此集だけでも一部通讀するのは、容易の事でありませぬ。註釋書の中では鹿持雅澄もちのまさずみと云ふ人の『萬葉集古義』が一番完全なものです、全部

百五十二巻の大著述で、専門家でなければ、一々眼を通す事が出来ません。「萬葉集佳調」と云ふ、集中から選抜抄出した書も既に出て居りますが、單に一斑を知る事を得ると云ふのみで、敢て此集を代表するに足る作物が選擇せられて居るのではありません。元來、此集は、所謂無邪と云ふ風の作に富んでゐて、眞情流露、一點虚飾の痕をとゞめないのが長處であつて、亦短處なのであります。日常瑣末の事までも歌にしてありますから、御話の様な讀んであつけないのが、大部分を占めて居ります。この大部分を除き去つた一部の作には、非常に心持のよい、古い祖先のおほどかな氣象が、詩的に發揮されて居るのです。是等は追うて、後章で抄出しようと思ひます。

話が少し岐路にそれて、御尋ねの要件を逸しましたが、古歌の集の中から四季戀、雜に分類した者に『怜野和歌集』近代の歌人の作を矢張同じ體裁に分類した者に『草野和歌集』此二書は近代の出版で、左迄大部の者ではありませんから、一通り讀んで置く必要があります。

〔問〕萬葉集中の逸作は、追うて紙上で御教示を願ふ事にして尙日常参考に讀む歌書がありましたら、御聞かせを願ひます。

〔答〕左様、業平朝臣の『伊勢物語』の歌は、當年の新派のチャキチャキで思想と云ひ、句法と云ひ、確かに其時代を驚かしたもので、清少納言の『枕草紙』之は散文ではありますが、いかにも簡潔で甚しく短歌趣味である所、此二書は平安朝時代に在つて、溢

るゝばかりの新意を注いだもので、今の新しき歌人の参考に讀むべき良書であります。續いて『新古今和歌集』之は鎌倉時代の産物で、當時の一流の歌人藤原定家とて、例の百人一首を選した人が、勅命を奉じて、人々と共に選したもので、華麗目ざむるばかりの作に富んでゐて、技巧の最も進歩した時代を窺ふに便なので、彼の萬葉集の思想を前にしたのに對して、面白い對照です。それから、西行法師の『山家集』、鎌倉右大臣の『金槐集』近代になつては香川景樹、加納諸平及び蓮月尼、井上文雄の家集など、一通り目をとほす必要があります。

〔問〕近頃の新派歌集では、何ういふのが、我々の手引になるでせうか。

〔答〕明治時代の歌に始めて新しい生命いのちを與へられたのは、故落合直文先生で、先生の歌集は近く出版せられましたから、先づ此集より初めて、此集から生れた自分等の集にも讀み及びして行かれましたと思ひます。

(二十三)

さて今回は、前回の問答を承けて、故落合直文先生の『萩之家歌集』中から、初學者の仰いで模範にすべき作の一斑を擧げて、解釋し批評しようと思ひます。先生は明治時代の歌に新光明を與へられた恩人で、今の新派の歌は、實に温かい先生の御胸から生れたのです。現時の新派歌人の作物を讀む前に方

つて、先づ先生の歌を反覆熟讀するのが、當然の順序でありませう。

歌集は、先生が明治十四年(二十歳の御時)の秋、伊勢の皇學館を卒業して、上京せらるゝ道の記中の御作から初められて居ります。小夜の中山を越えらるゝくだりに、

ゆふ風にひとつ落ちくる松かさの音さへさびし小夜の
中山

といふ御歌が出て居りますが、いかにも寂しい晩秋の山の景色です。さらでだに尾花蒨萱枯れ伏して、吹き渡る夕風が身にまみくと、心細い所へ、菅笠の上に松毳が一つこぼれきたと云ふので、旅情の寂しさが一層に感じられませう。「一つ落

ちくる」のひとつは此場合最も適切に用ゐられたもので、之が爲めに一首の景致が働いて來ます。近來、此ひとつと云ふ辭が濫用されて居りますが、此作の様な場合に用ゐてこそ活きるものであります。此御歌などは、當時に在つて、すでに新しい傾向を示されたもので、廣く傳唱せられました。

一つもて君を祝はむ一つもて親を祝はむ二もとある松
初日影、神代おぼゆる門松に對して、一もとは大君の御代萬代とほぎ奉らむ、他の一もとはわが雙親の老久しかれと祈らむと云ふので、先生の高い人格もそゞろに偲ばれて、誰しも崇いゆかしい感に打たれませう。門松の歌は、古來陳腐相次い

で、讀まない先きから、内容が合點せられる様であつたのを、先生の此御歌は實に破天荒で、當時の評壇を騒がせたのも理りでした。

緋緘の鎧をつけて太刀佩きて見ばやとぞおもふ山櫻花
櫻の歌でれこも先例の無い所。堂々として優美な上品な
趣が、よく發揮されて居ります。意味は明かで、説明する迄も
ありません。四句の「見ばやとぞおもふ」は、上の少しタルミか
けんとする所を引締めて、力強く、五句の「山櫻花」も落ちついて、
一首完きを得るのです。此四句は漢詩の轉句と同じやうで、
重要な場合が多いのです。此御歌は當時の舊歌人が惰眠を

打破するに効の有つたもので、新派の歌は斯う云ふ動機から
世に呱呱の聲を揚げたので。此御歌は、先生を綽名して「緋緘
の直文」とまで申し傳へる様に有名になりました。

近江の海夕霧ふかしかりがねのきこゆるかたや堅田な
るらむ

湖上一面の夕霧で、八景の所在も分りませんが、今、雁の聲の
する彼方が堅田でありませう、と云ふ意味で、堅田は落雁で聞
えた八景の一つです。二句に「夕霧ふかし」と置いて、さて雁の
聲を點したる所、修辭の巧妙なるは申す迄もないのです。唯
一つ、怨を申せば、かたやかた田と調子の耳に障るのが惜しい

と思ひます。

小木曾山たかき梢の鷺の巢もあやふきばかり吹く嵐哉
 木曾山中の景色で、木立物古りし深山を揺する嵐の勢は、鷺
 の巢も危きばかりと云ふ壯大なる形容で、よく現はされて居
 ります。調子が今少し引き締つて居りましたら、一層壯大な
 感じを興へやうかと思ひます。「小木曾山」の小は小簾、小野、小
 田など、同じく、添辭で、意味は無い「木曾山」と云ふのと同じ事
 です。その他は字面のまゝで、別に説明を要しないでせう。

(二十四)

ふるさとのわが松島にくらべ見む朝霧はれよ天の橋立
 これは端書にもある通り、丹後紀行の中の御作で、先生の故
 郷は陸前ですから、ふるさとのわが松島にと言はれたのです。
 御承知の如く、松島も橋立も日本三景の一つで、風光の明媚を
 以て鳴りわたつて居ります。そこで、今朝霧籠めたる橋立の
 前に立つて、自分の故郷の松島の景色と何方が勝れて居るだ
 らう、比較して見ようと思ふのに、生憎、霧が深く籠めたこと
 ある、早く霧が晴れて呉れよばよい、と云ふ意味であります。
 一句と三句とに力が入つて、逆も自分の故郷の松島には及ぶ
 まいと云ふ心も含まれて居るやうに思はれます。尙、三句の
 「くらべ見む」が少し延びかゝつて來たのを、朝霧はれよにて引

き締め、天の橋立にてシツカリ結びましたから、一首にタルミ
 がありません。この作は、只見たまゝ感じたまゝを、そのまゝ
 詠まれたもので、一誦した所では、何の奇もない様ですが、繰返
 して読んで行くと、作者の面影も、橋立の景色も、目の前に現れ
 て来て、愉快の心持になつて参りませう。自然に、巧を弄さな
 い歌ほど、人心を動かすものはありません。

ものゝふの背におふ母衣のほろくくと鳩ぞ啼くなる八幡の宮に

これは、明治二十六年の末に、第一高等學校の學生が、鎌倉で
 發火演習を行つた時に、先生は同校の教授として、此演習に加

はられて、作られた中の一つです。鎌倉の八幡宮に、ほろく
 と鳩の啼いてゐると云ふ意味で、武夫の背に負ふ母衣のほろく
 句の「ほろく」と云ふ鳩の啼き聲を起さん爲めの序詞で、別
 に意味はありませんが、弓矢の神に對して、調和の妙を得て、此
 二句あるが爲めに、一首の調子が高く、鳩の聲が、いかにも神使
 らしい感じを與へます。品のよい感じの高い、作者の人格も
 しのばれるやうでせう。母衣は鎧の背に負うて、矢を防ぐ物
 です。

薄ッぺらな、氣品のない歌を喜ぶ人々に、コンなどつしりし
 た調子の高い作を読ませたいと思ひます。鎌倉右大臣(實朝
 卿)の作に、斯う云ふ調子の高い、莊重なものが多くあります。『も

のよふの矢なみつくろふ籠手の上に蔽たばしる那須の篠原』
 などは、此歌と著想は違つて居りますが、重みのある雄々しい、
 純日本趣味の點が、著るしく似通つて居ります。降つて、徳川
 時代に、賀茂眞淵翁が、斯う云ふ歌風を喜んで作られました。
 併し翁の本領は古學復興に在つて、學者として、より貴い人で
 ありした。

つく／＼し手にもちながら眠る子は夢も春野になほ遊
 ぶらむ

あとけない小兒の有様が眼に浮ぶ様です。つく／＼しは、
 俗につく／＼しんぼうと言つて、形筆に似て莖に節のある草です。

春の野で摘んで來たつく／＼しを手に持ちながら、遊びくた
 びれて寢入つてる子の夢も、なほ春の野に遊ぶ事であらうと
 云ふ意味です。罪のない無邪氣な小兒を寫して、今一度子供
 にかへつて見たい様な感じを與へさせます。調子がいかに
 もなだらかで、春の日の長閑なる様も見えるやう。

庭にちる花にもこゑのきこゆなりいかにまづけき夕な
 らむ

これは「春聲」と云ふ題で詠まれたものですが、題詠の常であ
 る机上の作の弊を脱して、いかにも自然で、静まりかへつて
 春の夕ぐれに散る花の音が、胸に沁み入るやうであります。

唯いかにしづけき夕なるらむと理つたのが、少々感服出来ません。「まづか」と言はないで、自ら静かならしむる趣を顯さなくては至妙と云ふ事は出来ません。著眼は太だ奇らかですが、言廻しの十分でなかつたのは残念であります。併し之は十何年も以前の御作で、今の進歩した眼で見ても、彼此申上ぐるのは僭越な次第でありませう。

家づとにもてきて植ゑし一もとの萩にもやどる秋の夕風

先生は家の名を萩の家と稱せらるゝ位、萩が非常に御好きで、御庭に萩を植ゑられた事は夥多しいもので、露おく朝な夕

な、風そよぐ月の夜など、此花にかゝはれる御歌を詠まれた数は、数へきれない程でした。併し、多くは散佚して、此集中にあるものは、其何十分の一か何百分の一かに過ぎません。此歌なども其一つで、旅行先きなどから、家への土産に持つて来て、窓の下などに植ゑられた一本の萩にも、秋の夕風が宿るといふ、寂しい中に、温かみのある所が、懐かしう思はれます。四句の「萩にもやどる」が此歌の中心點で、一首の生命は、懸つて此四句にあります。併し、すら／＼として、特に此句に意を用ゐられた痕がなく、よく全體が渾化されて居る所を、十分翫味しなければなりません。

(二十五)

母の背にむかしながめしわが身とは知るや知らずや故郷の月

久しく他郷に出で、何年ぶりかで歸省した人は誰でも斯う云ふ感じに打たれるでせう。母の背に『お月様幾つ』と歌ひはやした自分が、斯く成長して、月に對するのを、月は昔の自分であるとは知つて居るであらうか、何うであらう。幼い時とは、まるで面變りして居るから、若しや昔の自分と見間違ふ事は無からうか、と云ふ意で、字義は至つて平易ではありますが、含まれて居る情味は、深く濃かであります。四句の『知るや知ら

ずや』は確^ちかりして居て、一首の面白味は、此處にあるのです。若し、此句が『知らずやあらむ』と、假に在つたとすれば、輕薄に聞えて、情味で勝つて居る此歌の價値は、著しく減せらるゝ事ではなう。前々から申す通り、短い詩形では、一字一句も苟もしてはなりません。殊に四句と五句とは、最も意を用ゐなければならぬ所です。さて、此歌は洵に結構ではあります。望蜀の念を申しますと、二句の『むかし眺めし』の眺めしが、子供らしくないので。併し此眺めしは後へもさかせたのですが、それにしても、何んとか御工夫が無かつたかと思ひ感ひます。

わすれゆきし扇のぬしを呼びとめて涼しさかたる松の

下蔭

一讀直ちに涼味を覚え、再誦、腋下風を生ずるの心地が致します。初句の『わすれゆきし』で、扇も忘れゆくばかりの涼しさを覚えさせ、其扇の主を呼びとめて、涼しさを語るに至つては、呼びとめた人、呼びとめられた人、何れも、嫺雅なる様子が見えて、松の下蔭の會談が、いかに風流であつたかを想像させます。さうして、其松かげの前には、屹度一道の清川が流れて居つたか、清い泉が迸つて居つたでせう。涼しい景色が、目の前に浮んで、三伏の苦熱も忘るゝばかりです。

西行法師の有名な歌に『道のべの清水流るゝ柳かげえばしとてこそたちとまりつれ』といふ涼しげな作も、丁度此松かげ

と同じ趣の景色が見えて、感じの佳い所はありますが、四、五句の『えばしとてこそたちどまりつれ』は、御話のやうで上の句を説明したのに過ぎません。先生の御作の趣向が複雑して人事美を發揮せられた點に於いて、確かに古歌から一步出られた手柄を讀へなければなりません。新派の歌は斯くして、古人以外に地歩を占めなければならぬ様に、先生は今から七八年前に御手本を示して置かれたと見てよろしいのです。

父君よ今朝はいかにと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり

これは明治三十二年の春、先生が大患に罹られて、臥床せら

れた時の御作で、洵に情味の深い、涙が自然にこぼれて参ります。些かも言葉に巧んだ處がなくて、玲瓏珠玉の如く何んだか自然に頭が下つて來ます。真情の作の貴い事は、此御歌を見ても、身に浸みて來ます。二句の『手をつきて』は、最も人を動かす處で、七八歳の下げ髪のお嬢様が、小さい手をついて、御容體を伺ふ様子の御いたけさは、誰しも涙のさしぐむを禁め得られないでせう。斯る可憐なる愛子を置いて、何うして死なれよう、萬一此儘に果てるやうな事があつたら、いかせん、と重き御枕をもたげて思しつゝけられたのであります。一面上品な御家庭の様も見えて、親子の御情愛の深厚なのに、一段のゆかしさを覺えられませう。先生の御歌集中で、屈指の御

傑作である事は論を待たない所であります。

ねざめしてわれ見てあれば枕邊に消えむとすなりとも
し火の影

これも前と同じ御病中の折の作です。『消えむとすなりともし火の影』なんと心細い病中の情が能く寫されては居りませんか。消えむとして明滅せるともし火の影が、早う死ねよと呪ふやうにも見えて、此半夜の情は、言はむかたなき寂寥を覺えられたであります。燈影を見まもれる病みほうけた作者の眼の底に、さびしい潤ひも見ゆる様ではありませんか。

むらさきの雲にも似たる藤の花佛こひしくなりける
かな

藤の花から、むらさきの雲を聯想し、紫の雲から淨土を聯想して、佛にあこがれて來た意であります。遠く藤の花を望みますと、まるで紫雲のたなびく様に見えて、佛の國も彼の雲の奥にかと思ひ惑はるゝものです。聯想が自然で、わざとらしい處も見えませんが、よく、藤の花の趣を發揮して、いかにも、作者が斯う感せられたらうと思はしめます。もとより、苦心の御作ではありませんが、上品な棄てがたい作と存じます。

(二十六)

萩寺の萩おもしろし露の身のおくつきどころこゝと定
めむ

先生が非常に萩を愛せられて、家の名を萩の家と負せられたと云ふ事は、前に御話し申して置きましたが、此御歌などは萩を愛好せらるゝ餘りに、詠まれたものです。萩寺の萩がわけて御氣に入つて、わが墳墓の地は此寺に定めむとまで思し入られたのであります。「萩寺の萩」と萩を重ねられた所は、力が這入つて、毫も態とらしくなく、露の身の「露も」一首によく響いて居ります。さうして、おくつきどころこゝと定めむと、工まずにすらりと結ばれたのも、寂寥を添へて、よろしいと思ふ。まんみりとして、何だか辭世めいた御作ではありませんか。

目を瞑れば、故先生の面影が、あり／＼と見えて、秋燈、雨に蕭やかな窓の下で、誦むに堪へません。

萩寺は、東京市外龜井戸柳島村の龍眼等の別稱で、古來萩を以て鳴つて居る名所です。境内は餘り廣くはありませんが、萩を多く植ゑて、幽趣に富んで居ります。先生がこゝへ何度となく杖を曳かれて、去るに忍びられなかつた様も見えるやうで、御歿後こゝに遊ぶ毎になつがしい寂しい思を抱いて歸るのが常です。そして、先生は歿なられたのだと、今更の様に繰返して來るのです。

磯松を今はなれたる荒鷲のゆくへに見ゆる蝦夷の遠山

繪を見るやうです。此雄勁な趣は、凡手では決して描き了せられません。西京の日本畫の大家竹内栖鳳氏は、嘗て此様な景色を描かれましたが、荒鷲の羽ばたき高う、海空を翔りゆく雄健の筆致は、丁度先生の此御歌を誦む毎に、まさ／＼と目前に思ひ描かれる所であります。二句「今はなれたる」と「今」と云ふ時間を入れられたのは、景色を活動せしむる手段で、輕々に看過してはなりません。四句の「ゆくへに見ゆる」は、今、磯松を離れたばかりの鷲が、はや目路遠く翔り去つて、其行く方に、「蝦夷の遠山」が見ゆる、廣やかな趣をまのあたり展開せられませう。「蝦夷の遠山」は置き得て、尤も適切なるもので、妄りに他と置き更ふる事が出来ません。

秋晴れの日、青森灣頭などに立つて、遠く蝦夷が島根を望み見た景色でせう。はてしなく廣々した胸の開けるやうな御作です。

をとめらが泳ぎしあとの遠淺に浮環うきわの如き月うかびいでぬ

いかにも巧みな御歌です。少女等が遊泳具の浮環を持つて泳いだあとの遠淺に、その浮環のやうな月が浮び出たと云ふのであります。遊泳具の浮環を月に擬たとへて、月がその浮環の形して、泳ぎなれぬ都少女等が浮環を持つて、ジャブ〜して居つた遠淺に浮び出たと云ふなど、少女と云つて、遠淺と

承け、浮環と云つて、浮ぶと承ける所、一首、些かの隙間なく、修辭の妙を盡くして居られます。

海水浴の如き新題目を捉へて詩化さする事は、手腕を要する所で、此御歌の一點、卑俗の痕を留めないのを多とします。

併し、巧みな作に伴ふ弊は、細工に過ぎて、態とらしい所にあります。此御歌の主眼點は四句の「浮環の如き」にあります。見様に依つて、此句が「首を妙ならしめ、又厭味に感せしめ」するのです。此御歌の様に技巧の妙を得て居りますと、厭味と思はるゝ個所も、掩はるゝのです。之は先生の如き方であればこそ作りこなされた「初學の人の、妄りに倣ふ所ではありません。此點に就いて、諸君は迷はぬ様にせられたい。

かたぶきて何をか共におもふらむ二もと立てる姫百合の花

二もと立てる姫百合よ、頭かたげて、共に何を考へて居るのであらう、可憐なる事よと、つくづく見入られて詠まれた御作でせう。優しき作者其人も髣髴せられて、一首の趣が愈加はります。

上句の擬人法は、此作に生命を與へて、妙なる所です。さうして此上句は能く姫百合の姿を顯して、他の花と置き更へる事が出来ません。何の花へでも應用が出来るやうでは、歌の生命が失はれます。人をして實にもと首肯かせて、作者と同じ入興の地に立たせるのは、其取材の特質がよく發揮せられ

て居つて、動かす事の出来ない様でなければなりません。此御歌などは、よく此約束に適應して居るものです。

(二十七)

君が袖にふれてうごきし白あやめ明日むらさきに咲き
やかはらむ

此御歌は、白あやめの特質を發揮し得たもので、上品な情ありげな花が見えるやう。優雅な趣はよく一首に充ち溢れて、言ひ知らぬ懐しみを覺えます。二句「ふれてうごきし」の「うごきし」は、洵に微細なる觀察で、後句を惹き起す動機となるものです。「明日むらさきに咲きやかはらむ」とは、何たる溫柔にし

かたぶきて何をか共におもふらむ二もと立てる姫百合の花

二もと立てる姫百合よ、頭かたげて、共に何を考へて居るのであらう、可憐なる事よと、つくづく見入られて詠まれた御作でせう。優しき作者其人も髣髴せられて、一首の趣が愈加はります。

上句の擬人法は、此作に生命を與へて、妙なる所です。さうして此上句は能く姫百合の姿を顯して、他の花と置き更へる事が出来ません。何の花へでも應用が出来るやうでは、歌の生命が失はれます。人をして實にもと首肯かせて、作者と同じ入興の地に立たせるのは、其取材の特質がよく發揮せられ

て居つて、動かす事の出来ない様でなければなりません。此御歌などは、よく此約束に適應して居るものです。

(二十七)

君が袖にふれてうごさし白あやめ明日むらさきに咲き
やかはらむ

此御歌は、白あやめの特質を發揮し得たもので、上品な情ありげな花が見えるやう。優雅な趣はよく一首に充ち溢れて、言ひ知らぬ懐しみを覺えます。二句「ふれてうごさし」の「うごさし」は、洵に微細なる觀察で、後句を惹き起す動機となるものです。「明日むらさきに咲きやかはらむ」とは、何たる溫柔にし

て優麗なる詞句でせう。初句の「君が袖に」の君なる人の姿かたちも想像せられて、其袖の模様まで、さやかに眼に浮ぶやうではありませんか。

此種の作は、兎もすれば、才を弄して、厭味を覚えしむるものでありますが、先生の此御作には、更に其臭味が無いのみならず、却つて美しい快い感じの起るのは、何ういふものでありませう。夫は感興の作であるからです。感興は詩作の上に最も大切なるもので、之あるが爲めに生氣を得、之なきが爲めに細工に陥るを常とします。感興も起らぬのに、強ひて製作を試みますれば、わざとらしい厭味なものを得るに過ぎません。此御作などは、白菖蒲に對せられて、優しく美しく感せ

られ、花の中から抜け出たやうな麗人を想ひ浮べられて作られたものと思ひます。此詩的想像は、感興の餘に得られたもので、机上の空想とは趣を異にします。

それから、今一つ此御作に就いて、留意しなければならぬ點は、色彩の調和の妙なる所にあります。「白あやめ」と云ひ、むらさきに云々と云ふ、此白と紫との色彩の調和は最も上品で、且自然で、感じがよろしいと思ひます。

此御歌の集中有数の傑作である事は、申すまでもありません。

遠く近くひびく五山の鐘の音も聴きわくるまで里なれ

にけり

これは端書はじまがにある通り、鎌倉にての御作であります。五山とは、建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺の五寺を指したもので、何れも禪刹であります。遠きは何の寺、近きは、くれの寺と鐘聲を聴けば、區別のつく迄に、鎌倉の里居に馴るゝ様になつたといふ意です。「五山」と云ふ漢語も一首に諧音を與へて、遠く近くと云ふ字餘りも少しも耳たゝず、却つて鐘聲の高低が耳もとに聞え來るやうで、尙四句の「聽きわくるまで」は前三句を承けて、最も妙なる所でありますが、結句は少し説明に過ぎ、如何かと思ひます。内容の韻致を尙ぶ此作の如きは外形を整ふる上にも、之にふさはしい用意を要するのは、申すまで

もありません。此御歌は、洵に結構であります。何うも結句に韻致を缺いてるやうに感ぜらるゝのです。所謂頭重脚輕で、語はてゝ後、餘韻孺々たることを得るに難からうかと考へます。此御作に惜しむ所は、實に此點にあります。

牡蠣殻をのせたる蟹が屋根の上に鶴鴿なきて日は暮れ
むとす

漁村の夕景色がよく寫生されてあります。四句、鶴鴿なきては、靜中、動を加へたもので、此一句の爲めに、一首が働いて來ます。漢詩の所謂轉句と云ふ所で、よく其妙を移されたものと思ひます。鶴鴿ならぬ外の鳥では、此靜寂なる景致に對し

て、不調和となります。鶴鶴は動かす事が出来ません。

舟うけてをりく君の訪ひまさば住みても見ましかの
はなれ島

「舟うけては舟うかべて」の意。わが思ふ君よ、君若し舟を浮べて、折々われを訪ね給はらむとならば、かの離れ小島に住みて見む、一人島居の寂しさも堪へ忍びて在らむものをとの意で、情味濃かな女性に代つての御作と思はれます。上品な戀歌で、一點下卑た所はありません。先生の戀歌は概して斯う云ふ懐かしい、情味の籠つてる様な作でした。つゝましい、情のあるのを好まれたのは、先生の人格の致す所であります。

湖のかなたの寺の鐘の音の今日もきこえて今日もまた
暮れぬ

前の五山の鐘の音にくらべて、下句たしかに此御作の方勝りざまに思はれます。「今日もきこえて今日もまた暮れぬ」とは餘韻盡きんとして盡きず、鐘聲また讀者の耳邊を迷うて、今日も暮れぬと吐かしむる趣があります。詩の妙諦に入つたものではありませんか。

以上で讀者諸君は驚けながら「萩の家歌集」の内容が御分りになつたと思ひますから、進んで、近世の歌人の集中より、遠き萬葉集に迄及ぼして、講述する心算でしたが、それは近刊の「古歌一斑」に譲つて、こゝに本書の筆を

和歌入門 畢

漏く事とします。不十分なる記述は、讀者諸君に向つて深く謝する所でありませう。

明治三十九年十二月十七日印刷
明治三十九年十二月十九日發行

(定價金四拾錢)

不許複製

著者 金子雄太郎

發行者 中根駒十郎

印刷者 藤澤外吉

東京牛込區新小川
一丁目十三番地
東京牛込區新小川
一丁目十三番地
東京東區田中

發行所

東京牛込區新小川
一丁目十三番地

新

潮

社

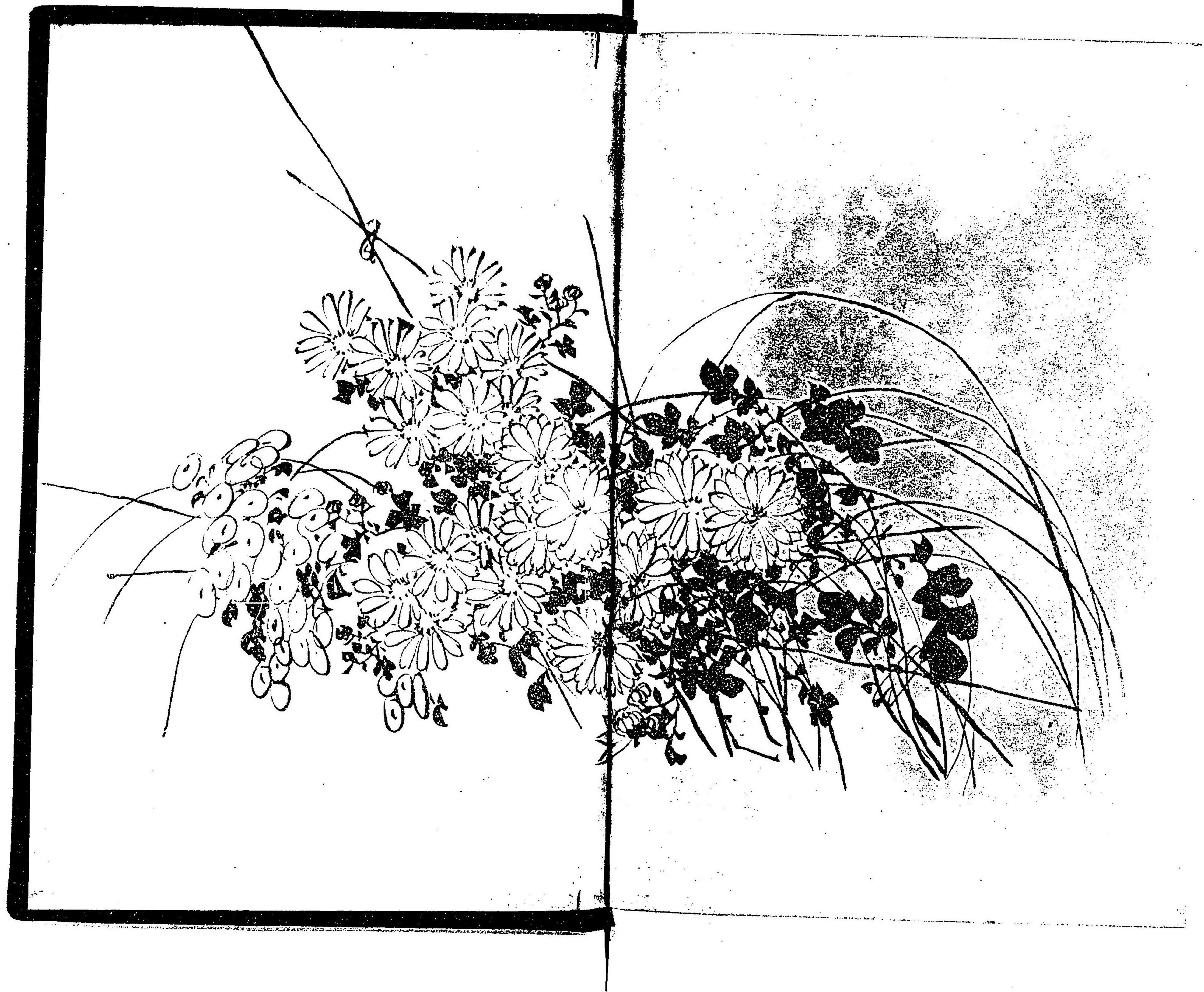
秀光社活版所印行

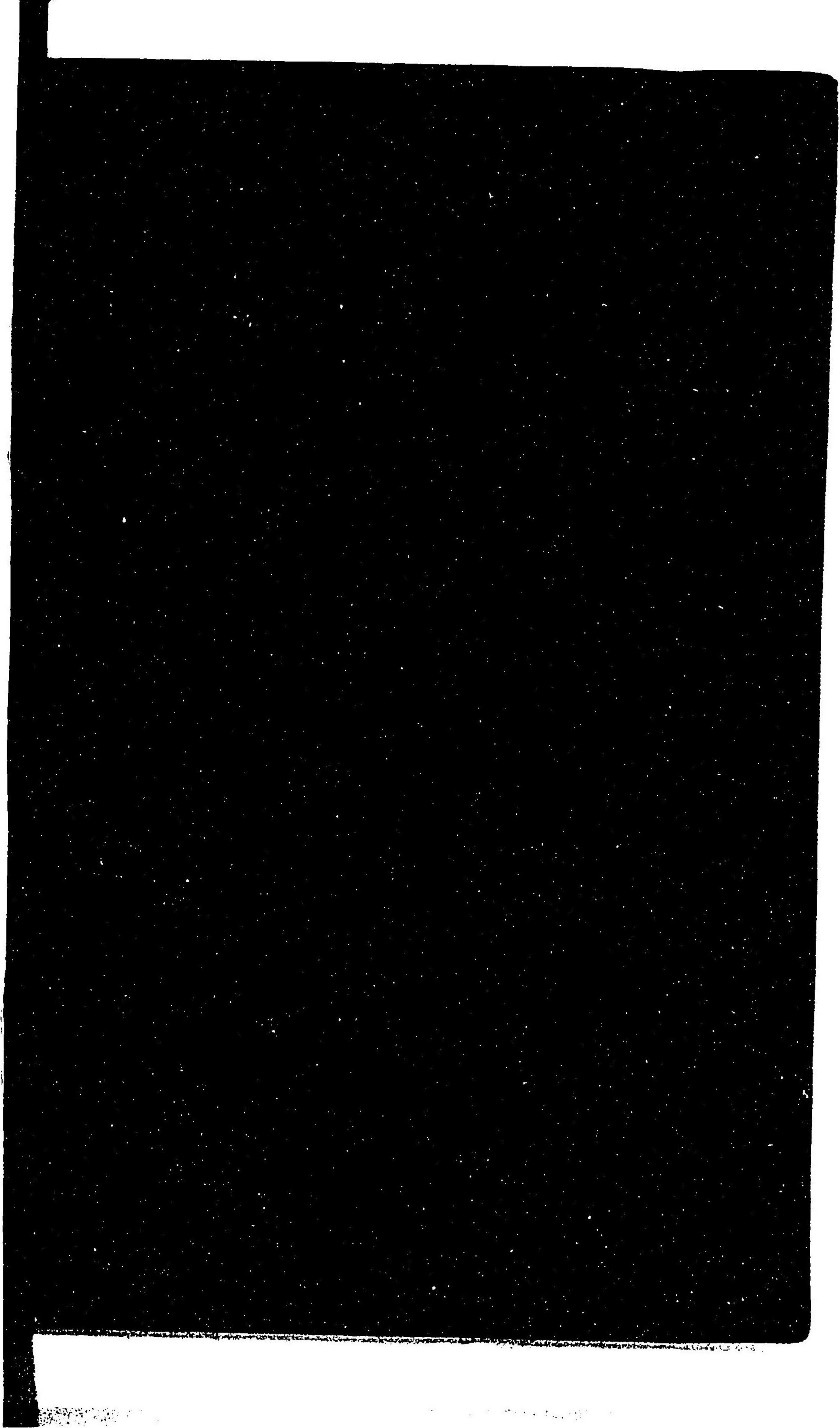
早稻田大學 文學士 長 連恒先生著
學習院教授

源氏物語梗概

總クロース上製
表紙金銀色刷
定價金七拾五錢
郵税金八錢

源氏物語は管に平安朝のみならず、古今を通じて我國第一の小説也。優婉豊穠、含蓄窮りなきの大字を以て、社會の表裏を洞察し、人情の秘鑰を把持し、驕奢淫柔の極に達せる平安貴族の生活を寫して、生彩奕々錦繡の目を射るが如し。然りと雖も、危然たる大帙、之を讀破すること容易にあらざるは勿論、行文迂餘曲折を極めて、深き國文の素養ある者尙ほ其解し難きを憂ふ、著者之を慨して、慘憺の經營を積みこゝに、一卷の梗概を公にせらるるよく原著を陶冶融化して、五十四帖の大綱を四百頁の間に收め、描くに優麗簡潔なる時流の美文體を以てし、一般讀書家をして遺憾なく原著の眞趣を咀嚼玩味する事を得せしむ。





086846-000-7

特22-118

和歌入門

金子 薫園/著

M39

DBD-2107

